

千河岸貫一著

日本立志編

一名脩身規範

板權所有 雙書房合梓

日本立志編卷三目次

勤勉ノ部

高大ノ志アリト雖凡勤勉スルニ非ズンバ事業

成就ス可カラサルヲ叙ス

第一 粟田左大臣謹恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事

第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事

第三 稻葉一轍文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事

第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事

第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事

第十六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語リシ事

第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事

第八 三宅重國獄ニ在テ書ヲ著セシ事

第九 貝原篤信老テ猶ホ怠ラサリシ事 十五丁

第十 原尚菴學ヲ嗜ム事 十七丁

第十一 澤維顯遊戲ヲ好マサリシ事 十八丁

第十二 井上嘉勝戸ヲ閉ダテ書ヲ讀ミシ事 二十丁

第十三 伊藤莊治古語ヲ燈ニ貼シテ自ラ警シメシ事 二十丁

第十四 加々美光章線香ヲ燒テ書ヲ讀ミシ事 二十二丁

第十五 神屋彌左衛門文武ニ兼通セシ事 二十三丁

第十六 中西維寧恆ニ寢ニ就クヲ無カリシ事 二十五丁

第十七 蘆野孝七郎幽囚セラレテ書ヲ著ハセシ事 二十七丁

第十八 石多仲曆子一冊ヲ笈中ノ燈ニ糊塗セシ事

二十八丁

第十九 莊田靜志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ラ勗メシ事 二十九丁

二十九丁

第二十 細井德民篤志力學ニ由テ德望ヲ得タル事 三十丁

三十丁

第二十一 並川彌左衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事 三十一丁

第二十二 應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦セシ事 三十一丁

第二十三 森祖仙三年山ニ在テ其技ヲ切磋セシ事 三十二丁

第二十四 熊代彦之進虎園ノ前ニ在テ虎ヲ畫ハシ事 三十二丁

三十二丁

第二十五 池無名發憤苦勵セシ事 三十三丁

第二十六 皆川淇園讀書ニ謹勉セシ事 三十三丁

第廿七 頼子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事 甲子

第廿八 古川某地理ヲ究メンガ為メニ海内ヲ歴遊

セシ事 甲子

第廿九 森宇左衛門書ヲ手寫シ數十篋ニ至リシ事

甲子

第三十 觀世次郎太夫僧父ヲ師トセシ事 甲子

第卅一 實生彌五郎指ヲ咋ムデ假面ニ血スリシ事

甲子

第卅二 山田琳卿學業ヲ勤メ實踐ニ厚カリシ事 甲子

日本立志編卷三

十河岸 貫一 撰述

勤勉又部

人高遠ノ志アリト雖也、勤勉スルニ非ズンバ、事業ノ成就ス可カラサルヲ叙ス、

人恒ネ一儉素ヲ尚トセ、其志ヲ高遠ニシ、敢テ奢侈ノ風ニ眩セズ、小成ニ安ンズルノ俗ニ泥マスト雖也、遊惰ニ其志ハ所ノ事業ニ刻苦セズンバ、種ヲ辰田ニ播シテ、而シテ耨ラザルニ同ジ、何ヲ以テ其事業ヲ成就スルヲ得ンハ、且夫人心ハ、途ヲ所ニ境ニ隨テ移動シ易ク、時ハ火ヲクモ止反ス、一日廿四時アリト雖也、現在ノ時ハ僅カニ

一秋時、ミ。前ナル者ハ既ニ去テ復タ還ラズ。後チナル者ハ未タ來ラザレバ、預メ之ガ措置ヲ爲シ難シ。人生ニ萬六千餘光陰、此現在ノ一秋時ヲ多ク積累セシモノニ外ナラス。然ルニ其腦裡ニ於テ、一タビ某事ヲ爲シ、某業ヲ成リシトスルノ志ヲ興スアリトモ、或時ハ存在シ、或時ハ亡滅シ、有ルカ如ク無キカ如クナラシニハ、決シテ其事業ヲ成就スヘカラサルナリ。故ニ一タビ志ヲ立テ、某々ノ事業ヲ果タシ遂ゲシト思惟セル。一秋時間ノ思想ヲ、永ク保續シ、以テ身ヲ終フルニ至ルキハ、所謂精神到處金石皆透ル。何事カ成ラザランヤ。然ルニ其初志ヲ保持シ、以テ久キニ及ブニ就テハ、種々ノ障礙ヲ來タシ、其志ヲ遮斷セラレシ無キ能ハズ。其之ヲ遮斷セラレ、ニ際シ、百折抗マズ、一挫キ屈

セズ、銳進シテ止マサル所ノ勤勉力アルニ非ズニハ、決シテ其初志ヲ遂グルノ日ニ逢フ可カラザルナリ。彼松柏ノ聳蒼トシテ天ニ參ハルヲ視ヨ、幾多ノ風雨霜雪ヲ經テ、其色ヲ改メズ、其年ヲ經ルノ最モ久シキハ、天下ノ良材トナル。人有用ノオト呼ビ、有爲ノ士ト稱セラレ、モ亦然リ。若シ其勤勉スルノ僅カニ數月、若クハ期年ニシテ、人材タラントスルハ、猶ホ獨落ノ老タカ大ナルカ如キ者ノミ、亦何ソ齒牙ニ措クニ足ランヤ。然レバ則チ洋ノ東西ニ論無ク、時ノ古今ヲ問ハズ、人生事業ノ成否ハ、勤勉ノ多寡如何ニ由レリ。然ルニ世人或ハ先賢古哲ヲ視、勉モスレバ天資英敏ニシテ勉強ヲ待タズト爲ス。是賢哲ガ尋常ニ百倍スルノ力ヲ用キタル苦辛ヲシテ、水泡ニ歸セシムル者ト謂フベシ。

常人ハ勉強ニ間斷アリ。工夫ニ罅漏アリ。唯賢者ハ間斷ナ
 ズ。罅漏ナク。精純不息ナルガ故ニ。能ク常人ノ到ル能ハ
 ルノ地ニ達セルノミ。即文ノ聲々。孔子ノ敏求。周公ノ旦ヲ
 待ツノ類。聖人ト雖モ。ミナ然ラサルハ無シ。朱子云。堯舜禹
 湯。舜取諸人。堯是位。故行將去。某嘗有朋友。好論聖賢等級。看
 末却。不消如此說。如千里馬也。須使四脚行。鴛鴦也。是使四脚
 行。不成說千里馬。都不用動脚。便到千里。只是他行快。快耳。ト
 此說真ニ然リ。然ルニ。快ヲ好ミ。勞ヲ厭フハ人ノ常情ナル
 ヲ以テ。數其志ヲ激勵スルニ非レバ。怠惰ニ流レ易シ。左一
 列記スル所ノ如キハ。則チ古來有名ノ學士等ガ勤勉儉マ
 ガリ。事蹟ニシテ。後進ノ士ガ其心志ヲ激勵シ。之ヲシテ
 間斷無ク。罅漏ナカラシムルノ鞭策タルベキモノナラン

ト云爾

第一 粟田左大臣謀恪ヲ以テ嘉尚セラレシ事

藤原在衡朝臣ハ。中納言山蔭ノ孫ナリ。伯父有頼養テ嗣ト
 爲ス。延喜十二年文章生ト爲ル。安和中累進。ミテ從一位右
 大臣ニ至リ。尋テ左大臣ニ轉ス。其職ニ在ル。未ダ嘗テ朝參
 ヲ廢セズ。一日風雨暴烈ナリ。衆相謂テ曰ク。勲恪在衡公ノ
 如キモ。亦朝參ニ艱ムト。言未ダ畢ラス。策位者至ルアリ。之
 チ視レバ。則チ公ナリ。時人歎稱ス。公豫テ帝ノ讀ム所ノ書
 ヲ知り。朝ニ入ル毎ニ。車中必ダ其書ヲ載セ。顧問スル所ア
 レハ。則チ應對明悉ナリ。是ヲ以テ才學ノ人ニ過グル無シ
 ト雖。凡深ク嘉尚セラレ。其薨ズルニ及ビ。從一位ヲ贈リ。粟
 田ノ左大臣ト稱ス。

櫻所子曰ク、凡ソ士朝ニ在ルト野ニ在ルトニ論無ク、各自ノ勤ニ服シテ怠ラサルヲ以テ、修身ノ第一義トス。假令イ學ノ人ニ過タルアリト雖モ、苟モ其職務ニ怠ラバ、瑕疵トシテ指斥セララル、ヲ免ガレズ、宜ナル哉。公ガ才學人ニ過タルナシト雖モ、其謹勉ノ人ニ過タルヲ以テ、湛々嘉尚セラレシテ、今世才ヲ負ヒ氣ヲ恃シテ、各自ノ勤ニ服スルヲ厭フ者、假令才氣人ニ過タルアリト雖モ、遂ニ世ノ輕淺ナル所トナラン。

第二 馬場信房松本桂林ヲ疎ミシ事

松本桂林ハ、書ヲ讀ミ、善ク和漢ノ事蹟ヲ知ルヲ以テ、或時馬場美濃守信房、諸葛孔明ノ人トナリヲ問フ。桂林即チ説テ曰ク、孔明ハ躬カラ耕シ、劉備其材能アルヲ聞テ、三たび

草廬ヲ顧ミシニ及ビ、遂ニ三分割據ノ策ヲ畫セリ云クト、信房以テ為ク、桂林ハ學者ナリト、時ニ真田ノ家ニ計同、須原宗左衛門ノ來リ訪フニ會ス。信房之ニ接スル頭ハ、鄭重ナリ、其辭リシ後、桂林惟ムテ謂テ曰ク、彼ノ輩ハ他人ノ事ノ微俸ヲ享ルモノナリ、何ゾ其接遇ノ太々鄭重ナルヤト。信房此ヲ聞テ以爲ク、我ハ劉備カ材能アリ、農夫ヲ止ムニ、三たび駕ヲ枉ケテ聘セシト聞ケバ、人ノ材能ハ尊貴ヲ得者ナリ、彼甘利須原ニ士ノ如キハ、智畧アリ、勇武ノ名譽高シ、若クナルヲ以テ、其材能ヲ敬シテ、懇懇ニ接待セリ、然ルニ桂林自カヲ劉備、孔明、風雲際會ノ事ヲ説キ、我ニ對シテ、我ノ才學ハ言行相撞着スルニ非ス、然レバ則チ書ヲ讀ムコトヲ解セザルモ、其事實ニ体達スル者ヲコトテ、真ノ學者

櫻所子曰ク世ノ講學ヲ事トスル輩、徒ニ文字章句ノ末ヲ
攻メ、或ハ博洽記誦ヲ貪ホリ、唯々トシテ議論ヲ逞フスル
モ、曾テ心上ニ向テ、前賢古語ノ言行如何ト推究セザル者、
滔々トシテ皆是ナリ、口ニ修身ヲ説キ、心ニ志操無ク、檢束無ク、何ゾ其類シ
イヒ自由トイフモ、心ニハ志操無ク、檢束無ク、何ゾ其類シ
テ學士論者ト稱スルヲ得ンヤ、雨後芳洲謂ヘルニ、
ク諸レハ才賦、場ニ觀ル、且ツ茅、婦タリ、且ツ叢夫タリ、觀者ヲ
シテ心ニ感シ、淚ヲ揮ハシメザルハ、ハナシ、稱讚ヒマズ、戲終
レバ、則チ無ニ仍テ庸夫俗子ナルノミ、書ヲ講ズル代、
如キモ、皆一優人ノミト、善哉言々、余ノ所謂學者ハ、則チ衆
國弟子ノ忠臣節婦ヲ粉スルト一般ニシテ、觀見ノ以聲ヲ

為シ、盧登ノ假面ヲ冒フテ、人ヲ欺セントスル者、多カラズ
トヒズ、美濃守ノ爲メニ疎マレザル者ハ、蓋シ鮮ナシ、學ニ
志ス者、意ヲ躬行心得ニ注カズンバ、アル可ラス、

第三 稱葉一徹文雅ヲ以テ害ヲ免カレシ事

稱葉伊豫守通朝後チ髮ヲ削ラ一徹ト稱ス、齋藤龍興ニ仕
ス、龍興暗弱ニシテ暴政多シ、將士多ク心ヲ織田氏ニ歸ス、
通朝驛諫ムレト改メス、通朝其與モニ爲スアルニ足ラザ
ルヲ知り、終ニ去テ織田氏ニ屬ス、而シテ信長意未ダ釋然
タル能ハズ、乃チ茶室ヲ設ケ、之ヲ茶室ニ延キ、竊カニ其臣
三人ヲシテ、伴接ニ托シ以テ之ヲ圖ラシム、一徹從容トシ
テ茶室ニ入り、壁間挂ル所ノ詩ヲ朗吟シテ曰ク、雲橫秦嶺、
家安在、雪擁藍關、馬不前ト、三人就テ其義ヲ問フ、一徹曰ク、

是、唐ノ韓愈カ、潮州ニ、謫セラレ、時作レハル詩ナリ云々
ト、其事實ヲ分解スル甚ダ詳カナリ。信長登ラ隔テ、頃聽
シ、忽然トシテ走リ出デ、一徹ニ謂テ曰ク、我レ初メ卿ヲ以
テ一武勇男子ト謂ヘルナリ、今乃チ其文學アル此ノ如ク
ナルヲ知ル、猜疑ノ心頓ニ消ス、何ゾ殘害スルニ忍ヒンヤ
ト、乃チ告クルニ、密謀ヲ以テス、三人ニ命ジ、各ヒ首ヲ懷ヨ
リ出サシメラ之ヲ示ス、一徹頓首シテ謝シ、袖裏亦刀ヲ出
シ、笑テ三人ニ謂テ曰ク、今日ノ事、僕モ亦我心無キニ非ズ
ト、信長嗟賞之ニ久シ。

櫻所子曰ク、危哉一徹、若シ不學無術ニシテ、文字ヲ解セス、
古人ノ詩ヲ演説スル能ハズンバ、焉ンゾ刀俎魚肉ノ間ニ
在ラザル、從容トシテ以テ萬死ニ一生ヲ得ルアランヤ。

夫レ人ハ其心ヲ娛マシムルヲ無キ能ハズ、詩歌書畫ヲ學
ブカ知キハ、心ヲ娛ベシムルノ資料ニシテ、但輕重未末ヲ
失ハザレバ、其益多シ、況ヤ學術德行ノ身ヲ立テ家ヲ興ヌ
ベキ者ニ於テヤ。

第四 佐野了伯平語ヲ演セシメタル事

佐野了伯ハ、佐野ノ城主佐野宗綱ノ弟ナリ、駿ヲ削テ天徳
寺ニ主ト爲レ、天正十三年、京綱没シテ嗣無シ、了伯佐竹義
直ノ族ヲ以テ嗣ト爲サント欲ヌ、其老大貫某竹澤某等、背
シセス、北條氏政ノ弟氏忠ヲ迎ヘ、立テ、嗣ト爲ス、了伯怒
リ、去テ京師ニ如キ、黒谷ニ隱ル、其驍名夙トニ著ル、ヲ以
テ、豐臣秀吉公、北條氏ヲ征スルニ及ビ、了伯ヲ召シテ、卿導
ト爲ス、佐野氏ノ舊臣ヲ招降ス、時ニ氏忠小田原ニ在リ、留

守ノ將士皆了伯ニ應ズ。獨リ大貫氏從ハズ。乃チ攻メノ之
ヨ教ス。秀吉了伯ヲ以テ佐野ノ城主ト爲ス。了伯之ヲ辭シ
富田左道將監次子政綱ヲ以テ京綱ノ後ヲト爲サンヲ請
フ。之ヲ許ス。了伯人トナリ。智辯ニシテ。義ヲ重ンズ。嘗テ琵琶
法師ヲ却キ。平語ヲ演セシム。曰ク。我カ爲トニ悲愴ノ曲
ヲ奏セヨト。對テ曰ク。諾乃チ佐々木高綱守治川ノ曲ヲ奏
ス。了伯愴然トシテ。涕下ル。奏シ闕テ又一曲ヲ請フ。那須宗
高扇ノ的ノ曲ヲ奏ス。了伯愴然トシテ。涕ヲ出シ。後チ左右
ニ語テ曰ク。前日ノ平語汝チニ於テ如何感テ。對テ曰ク。絶
々歎ナリ。獨リ帷ニ。二曲皆勇氣奮發。入ノ胸懷ヲ快フス。而
シテ。君獨リ之ヲ悲ム。ハ何ゾヤ。了伯夢ジテ曰ク。吾今ニ
シテ。後チ汝カ輩皆頼ムニ足ラザル。ヲ知ルナリ。夫レ高綱

騎ル所ノ馬ハ源右衛門之ヲ其親弟トシ。其監臣トニ予ヘバシ
テ。獨リ之ヲ高綱ニ賜フ。高綱右衛門。矢テ曰ク。臣家ニ先ダ
ハテ守治川ヲ騎渡ヒズニ。復タ生還セズト。宗高ハ如キ
モ亦然リ。源判官眞經。上固ヨリ是シカラザルナリ。而シ
テ宗高衆ニ拔カレ。獨騎海中ニ向フ。兩軍皆戰ヒテ息ム。テ
觀ル。是時ニ當リ。若シ射テ中タラスンバ。宗高必ス屏服シ
テ死セン。ニ予ハ先ツ死テ胸中ニ決ス。是ヲ以テ其情ヲ察
ス。我レ安ゾ之ガ爲ニ悲マザルヲ得ンヤ。我戰ヒニ臨ム
常ニ予ハ心ヲ以テ心ト爲ス。故ニ其曲ヲ聽テ其感ニ堪
ヘザルナリ。汝等ガ勇ハ唯血氣ニ任カス。其實ニ出ルニ非
ズ。事ニ臨ンデ豈ニ恃ムニ足ランヤト。了伯曰ク。我ハ
櫻所子曰ク。志士ハ講學ニ在ルヲ怠レズ。勇上ハ其元ヲ喪

一ノ忘レテ故ニ古代戰陣ニ於ケル事ヲ聞ク亦悲愴ノ感
 情ヲ喚起スルヲ致シ所以ナリ所謂活眼ヲ以テ活書ヲ讀
 ム者了伯ノ平語ヲ聽クカ如キヲ謂フナル可シ思フニ古
 來英雄豪傑ノ七及ビ一技一藝ニ名アル者ハ其志恆ニ存
 シテ精神ヲ養ヒ止メサル無シ親ヲ邪泰ハ持テ求ムルノ
 心アリ故ニ茅容ガ雨ヲ避ルヲ見テ其異常ノ器能アルヲ
 知ル越前少將勇武ヲ以テ天下絶倫ト稱ヒラレシトスル
 ノ志恆ニ存テ故ニ舞妓ノ曲ヲ奏スルヲ觀ルモ亦涕泣ス
 顔面ハ孝養ヲ思フ故ニ能ク見テ老ヲ養フヘキ者トシ盜
 跖ハ翻テ之ヲ凶機ト稱シ其ノ具一鳥ニカ如シ然レバ則チ
 了伯カ平語ヲ聽クハ務シテ以テ史ヲ讀ミ書ヲ解クハ
 法ト爲テ可キノミナラス學藝技術ニ志ス者ハ皆然リ

神ヲ恆ニ其學習スル所ニ存スレバ遇フ所ノ地澤テ其志
 氣ヲ激勵シ誘テ以テ地境ニ趣向セシムルノ具タテサル
 無キヲ知ルニ足ラン夫レ此ノ如クナラバ天地萬物耳目
 ニ觸ル所ノ者悉ク是我輩體中ノ物タリ若シ之ニ及シ
 テ酒色若クハ玩好ノ爲ニ其志恆ネニ存スルコト無クンバ
 口ニ中外古今ノ事蹟ヲ談シ心ニ和漢歐米ノ賢哲ノ嘉言
 善行ヲ讀ムズルモ善ニ所謂隣家ノ財産ヲ算フルル如シ
 亦何ノ益カアランヤ知ルベシ人ノ勇怯巧拙アリ智愚賢
 不肖アル所以ノ者至嘉勸勉ニシテ恆ニ其志ヲ精神ニ存
 養ムル無キト怠惰ニシテ時トシテハ其志ヲ遺失スルコ
 トアルトニ由ル察ヒサル可ケンヤ

第五 林羅山除日ヲ以テ講ヲ起セシ事

林信勝、羅山ト號ス、徳川氏創業ノ時ニ際シ、大ニ任用セラレ、儀則律令ヲ制定シ、幕府須ユル所ノ文書、其手ヲ經ザル者ナシ、初メ家康公ノ召ニ應ジ、四世ニ歷仕シ、即位改元、行幸入朝ノ禮、及ビ宗廟社稷祭祀ノ典、外國ノ事、與カリ議セザルナントイフ、其博洽ナル、天下ノ書ニ於テ讀マサルナク、著スル所凡ソ百有餘部、中ニ於テ水滸百五十卷、詞エナラザルモ、其言微スルニ足ル者多シ、其暮年ニ及ビ、入視聽衰ヘズ、寸陰ヲ惜ムデ、勤勉スルヲ、猶ホ以年ハ持テ減ゼズ、少キヨリ二十一史ヲ讀ム數過ニシテ、晉書以下未々句セズ、年七十四ニ及デ、過ネク之ヲ句セント欲シ、晉書宋書、南齊書業ヲ畢リ、其翌年ニシテ没セリ、羅山嗜テ人ニ感ハラレテ、祇園會ヲ觀ル、適ニ諸生棠陰比事ヲ袖ニシテ來テ

問フ、羅山一々之ヲ誦ク、林氏ニ移リ、遂ニ會ヲ觀ス、又羅山カ同門ノ人、皆得菴、成菴、羅山ニ謂テ曰ク、余未タ通鑑綱目ヲ讀マス、先生明春ヲ以テ余ガ爲メニ之ヲ講セヨト、羅山曰ク、子ガ心識ニ之ヲ求メバ、何ゾ來年ヲ待タント、即チ除日ヲ以テ講ヲ起ス、

櫻所子曰ク、慶元ノ時代、三尺ノ劍ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者、數ナルニ勝ニベカラズ、而シテ羅山道春、獨リ孔孟ノ道ヲ唱ヒ、遂ニ民部卿法印ト爲リ、乘輿城ニ入ルヲ聽スノ時、皆ヲ兼クルニ至ル、之ヲ我邦ノ叔孫通ト謂フモ可ナリ、其老ニ至テモ、勤勉倦ムヲ知ラズ、除日ヲ以テ講ヲ開キシガゴトキ、後進ノ士ガ懶惰ヲ整スルノ藥石ト爲スベキナリ。

第六 山崎嘉右衛門三樂ヲ語りシ事

山崎嘉右衛門、闇齋ハ其隣ナリ。京都ノ人、木下侯ニ仕フ。闇齋始メ江戸ニ到ル。寒、寒ニシテ、僦石無シ。故テ、ニ書商ニ鄰シテ、賃居シ。以テ、其書ヲ、借閱ス。是時ニ當リ、井上侯學ヲ好ミ、士ニ下ル。書商モ亦數謁見ス。一日、侯商ニ謂テ曰ク、寡人マサニ學バントス。爾チノ知ル所、人ノ師トスルニ足ル者アラバ、請フ爲メニ紹介セヨト。曰ク、近ゴロ一儒生、山崎嘉右衛門トイフ者アリ。京師ヨリ來テ、小人ノ東家ニ住ム。其以テスル所ヲ視ルニ、尋常ニ度越ス。閣下ニシテ之ヲ召サバ、其不虞ノ幸福ヲ得ルナリ。豈ニ感奮シテ、思ニ答ムルヲ思ハザランヤト。侯大ニ喜ビ、乃チ延致セシム。商歸テ闇齋ニ告グ。闇齋報然トシテ、曰ク、侯道ヲ問ハシトヒバ、則チ先

シ來ル。見曰、東、商、慨然トシテ、以爲ク、排大時勢ニ通ゼ。若シ此ノゴトキ、人ヲ驚メバ、必ズ上ヲ凌ギ、法ヲ無ミ。累自カラ及バン。驚メザルニハ、若カズト。他日、侯復々問テ曰ク、曠昔告グル所ノ山崎生ハ如何ント。商曰ク、小人惰ルニ非ルナリ。前日、既ニ命チ渠ニ傳フ。渠曰ク、侯先ツ來テ余ヲ見ヨト。是頑愚ニ非レバ、即チ狂率名ヲ邀ムルナリ。請フ則ニ通儒ヲ選ベ上。侯啞啞良久フシテ曰ク、方今師儒ト稱スル者、多クハ道ヲ行フニ意口無シ。東奔西走、其技ノ售レ易キヲ欲ス。而シテ、孤之ヲ聞ク。禮來學ヲ聞ク。往教ヲ聞カズ。山崎生能ク之ヲ守ル。此レ乃チ真儒ナリト。即日、駕ヲ命シテ、其居ヲ訪フ。其祭薦、權貴ニ屈セザル。概ネ此類ナリ。闇齋ノ學、初メ專ラ、濂洛ヲ祖トシ、晚ニ及テ、吉川惟足ニ從ヒ、神道

ヲ學ビ。遂ニ一家言ヲ主ツ。其學大ニ世ニ行ハレ。前後費ヲ
執ル者六千餘人。車馬門ニ滿ツ。

會津侯嘗テ開齋ニ問テ曰ク。先生樂ミアルカ。答ヘテ曰ク。
臣ニ三樂アリ。凡ソ天地ノ間生アル者何ゾ限ラン。而シテ
萬物ノ曠タルヲ得ル。一樂ナリ。天地ノ間一出一入。定數無
シ。而シテ右文ノ世ニ生レ。書ヲ讀ミ道ヲ學ビ。古ノ聖賢ト、
臂ヲ一堂ノ上ニ把ルヲ得ル。一樂ナリ。是レ臣ガ樂ミトス
ル所ナリト。侯曰ク。二樂ハ既ニ之ヲ聞ク。一ヲ得タリ。請フ
亦其一樂ヲ聞カント。曰ク。此レ其最モ大ナル者ニシ。ハ言
ヒ難キ。所以ハ者ハ。君侯必ズ信ゼズ。以テ毀譽誹謗ト爲サ
ント。侯曰ク。寡人不敏ナリ。雖庄先生ノ言ヲ奉ジ。敢々ト
シテ諫メヲ求メ。忠言ヲ渴聞ス。何ゾ今ニ至テ教ヘテ終ハ

ラザルヲカセンヤト。曰ク。君ノ言此ニ及ブ。某假令。我身ニ
逢フ。臣豈ニ言ヲ盡サ。ランヤ。所謂某ガ樂ハ最モ大ナル
者ハ。幸ニ身賤ニ生レテ。侯家ニ生レザル。是ナリト。侯曰ク。
敢テ問フ何ソヤ。曰ク。意フニ今ノ諸侯タルヤ。深宮ノ中ニ
生レ。婦人ノ手ニ長シ。不學無術。聲色ニ徇ガヒ。遊戲ニ耽ケ
ル。而シテ之ガ臣タル者ハ。主意ヲ迎合シ。其爲ス所ハ。因テ
之ヲ稱譽シ。其爲サハ。所ハ因テ之ヲ非毀シ。遂ニ本然ノ
性ヲシテ。措亡消滅セシム。其身賤ノ始ニシテ。辛苦ヲ嘗メ。
長シテ事務ヲ習ヒ。師教ヘ友輔ケ。以テ其智慮ヲ益ス者ニ
視テ。レハ何如ト爲スヤ。是レ某ガ身賤ニ生レテ。侯家ニ生
レザルヲ。樂シハ最モ大ナリトスル所以ナリト。是ニ於テ
侯茫然トシテ。自失シ。嘆息シテ曰ク。誠ニ先生ノ言ノ如シ。

櫻所子曰ク、今ノ少年、勤ニスレバ、輒チ曰フ、吾學ニ志スト雖、其學資無ク、大都ニ赴テ、研精スルニ由無シト。或ハ曰フ、良師無キニ非スト。雖、其書ヲ買フノ資無キチ、奈何ヒンヤト。而シテ富貴榮達ヲ慕フ。飢渴ノ飲食ニ於ケルヨリモ甚シク、業未ダ熟セス、學未ダ成ラスシテ、早ク既ニ禄ヲ求メ、微官薄俸ニ安ンズル者多カラズトセマ。之ヲ樹木ヲ未ダ長セザルニ伐リ、菓實ヲ未ダ熟セザルニ摘スルニ喩フ。豈惜シカラズヤ。視ヨ前哲先輩ノ寒劣ニ生長シテ、名ヲ成シ家ヲ興スモノ多ク、富貴ニシテ學識富贍ナル人少キヲ、**聞齋**ノ如キハ、其貧窶隣ヲ書肆ノ傍ニトシ、其衣ノ借贖スレモ、屹然トシテ守ル所アリ。敢テ權貴ノ人ニ屈セズ、鼻賤

ニ生ヒテ富貴ニ生レザルヲ以テ、樂ミノ最モ大ナル者トスルカ如キ、其志操ノ堅忍不抜トルヲ見ルニ足レリ。而シテ其天性峭嚴ニシテ、師弟ノ間儼トシテ君臣ノ如ク、教ヘ又受クル者、貴卿巨子ト雖、其之ヲ眼底ニ置カズ、書ヲ講スル音吐鐘ハ如ク、面容怒ルガ如ク、聽衆凜然トシテ敢テ仰テ見ズ。門生毎ニ竊カニ相告ケテ曰ク、吾儕未ダ幼稚ヲ得ズ、情欲ノ感時ニ動キ、自ラ制スル能ハス、則チ瞑目シテ先生ヲ一懇スレバ、欲念頓ニ消シ、寒カラズシテ慄スト。以テ其素行ノ如何ヲ知ルニ足レリ。歐人ノ諺ニ曰ク、奴僕ノ目ニ英雄無シト。是英雄豪傑ト雖、其平素ノ行爲ニ於テハ、自カラ其短所ノ掩フ可カラザルアルヲ謂フナリ。然ルニ日ニ其講惟ニ侍スルノ門生ニシテ、猶ホ此ノ如シ、翁ノ養フ

所知ルベキナリ。然レハ關齋モ亦人ナリ。後進ノ君子之ヲ
勉ムヨ。

第七 伊藤仁齋赤貧ニシテ苦學セシ事

伊藤仁齋ハ京都ノ人。家素ト骨ヲ業トス。仁齋幼キヨリ
異。捷發。群兒ニ異ナリ。其始、句讀ヲ習フ時、意已ニ儒ヲ以
テ一世ニ焜耀セント欲ス。稍長スルニ及ビ、堅苦自ヲ勵ム
親戚以テ利ニ迂ナリト爲シ、皆ナ之ヲ沮ンテ曰ク、學問ハ
是レ彼邦ノ事ナリ。此邦ニ在テハ固ヨリ無用ニ屬ス。假令
之ヲ能クスルモ、售レ易スカラズ。如カズ。醫術ヲ爲シ、以テ
生産ヲ致サシニハト。仁齋從ハズ。而シテ家日ニ貧。沮
ム者愈止。而シテ其志確キトシテ變ゼズ。其遠ニ赤貧
ニ至ルマ、歲暮糶麥ヲ買フ丁能ハズ。亦賦然トシテ以テ意

トセズ。喜躍キ進ムテ曰ク、家道有勦。妾未ダ嘗テ堪ヒスト
セズ。而シテ獨リ其忍フベカラザル者ハ、孺子原藏未ダ貧
ノ何物タルヲ解セズ。人家資アルヲ羨ミ、連リニ求メテ已
マズ。妾口ヲ能ク之ヲ諷呵スト。雖氏腸爲メニ斷絶スト。言
詭テ泣下ル。仁齋几ニ隱リ書ヲ閱ス。シ一言之カ答ヲ爲サ
ズ。直チニ其者スル所ノ外套ヲ脱シ、以テ妻ニ授ク。或時左
右比屋カラ戮セテ義井ヲ濬フス。仁齋之ヲ聞キ出テ、共
ニヒント欲ス。衆皆チ曰ク、吾曹之ヲ成セバ足ル。何ゾ先生
ヲ役スルトナセント。仁齋曰ク、敢テ義ノ辱キヲ謝セザラ
ンヤ。然リト雖、凡余此井ニ汲ム。既ニ泉ト異ナラズ。今豈ニ
獨リ與カラザルハ、理アランヤト。遂ニ鞭ヲ執テ其勞ヲ分
ツ。其貧ニ居テ威マズ。學識高フシテ人ニ騎ラザル。此ハ

如シ。嗣後侯祿千石ヲ以テ之ヲ招ク、辭スルニ、母老テ侍養
人、無キヲ以テス。利祿ノ爲ノニ其心ヲ動かサザル。亦此ノ
如シ。而シテ年六十二垂ントスルマテ。家猶ホ寒シ。其生徒
ヲ教授スルコト四十餘年。天下ノ學者四方ヨリ來テ之ニ
歸ス。國トシテ至ラザルナシ。唯飛騨佐渡壹岐三州ノ人ノ
門ニ及バサルノミ。謁ヲ執ルノ士。千ヲ以テ數フ。實ニ一代
ノ儒宗ト稱スベシ。

櫻所子曰ク。仁齋ハ市井ノ間ニ生長シ。其幼齡句讀ヲ受ク
ルノ日。早ク已ニ一代ノ儒宗タラントスルノ志ヲ抱キ。之
ヲ持スルノ堅確ナル。親戚之ヲ沮メドモ撓マズ。赤貧骨
徹スレド威マズ。千石ノ俸祿ヲ以テスルモ動かズ。春臺ノ
所謂仁齋ハ、豪傑ノ上ナリ。所謂文王ヲ待メズシテ、作ルモ

ハナリトハ。溢言ニ非ルナリ。世或ハ其家政ニ迂ナルト。花
街ヲ過テ花街ナルヲ覺ラザリシ事トヲ以テ。世事ニ遠
セサルヲ嗤ル者アリト雖。氏是未タ大小輕重ヲ知ラザル
者ノ言ノミ。逐々トシテ日ニ錙銖ノ利ヲ爭ヒ。若クハ大都
花柳ノ地ヲ諳ンズルモ。身ヲ修メ家ヲ齊フルヲ知ラズ
ンバ。是其重且大ナル者ヲ棄テ。小且輕ナル者ヲ取ル者
ノミ。何況ヤ仁齋ノ如キ。學師傳ニ由ラズシテ。徳川氏以來
ノ儒學ノ嚆矢タリ。躬行恭謙ニシテ。立身ノタメ。必ズ禮服
ヲ善ケテ炒豆ヲ撒ゼシカ如キ。其地ヲ過ギ其主ヲ禮セズ
シテ可ナランヤトテ。梵刹ヲ過ギ佛像ヲ見レバ。即チ拜セ
シカ如キ。細環ノ事ト雖。氏亦敢テ輕忽ニセズ。其爲實溫厚
中江藤樹ヲ除クノ外。亦見ザル所ニシテ。學者修身ノ模範

トス、キ研儒ナルヲヤ。

三宅重國獄ニ在テ書ヲ著セシ事

三宅重國ハ尚齋ト號ス。播磨ノ人ナリ。年十九ニシテ山崎
闇齋ノ門ニ入り、專ラ儒學ヲ攻ム。後チ江戸ニ遊ビ、阿
部侯ニ應ス。元禄中、將軍綱吉公、侯ノ邸ニ臨ス。重國ニ命ジ
テ論語ヲ講セシム。乃チ衣服ノ賜アリ。其官ニ在ル忠直稱
メテ其誠ヲ盡クス。居ル十一年。言行ハレサルヲ以テ疾ニ
移シテ致仕ヲ乞フ。允サレズ。猶ホ敷乞フテ止マズ。是ヲ以
テ罪ヲ得。武藏國忍ニ幽囚セラレタリ。重國其國ニ在、心
ヤ、志難奪、迫ハ際之ニ、處テ浴如タリ。乃チ謂ハ古人刑セラ
レテ尚ホ獄ク書ヲ著ハス。苦學ノ爲スト、無クシテ斃ル、
ナリ。シテ、然レハ、事墨得ヘカラス。因テ骨ヲ削ジテ、
獄

亮録三卷ヲ血書ス。侯人ヲシテ重國ヲ察セシム。重國即チ
詩ヲ作テ之ヲ示ス。其詩ヲ曰ク。

富貴壽久不レニ心、但向、而前養誠心、四十餘年學、何事、笑坐
獄中、鐵石心

其氣象豪爽ナル如此。獄ニ在ル十三年、故ニ會々テ放
タル。是ニ放テ去テ京師ニ之キ。儒ヲ以テ業ト爲シ。培報達
支ノ兩學舎ヲ、勘解由坊ニ建テ、業ヲ講ス。播紳公侯從游
ス。其者甚ク多カリシト云フ。

櫻所子曰ク、尚齋ハ獄ニ在ル、吾寧ク爲スト無クシテ斃ル
ルヲ待タンヤト。血ヲ刺シテ書ヲ著ス。此ニ至リシモノ、以
テ其平生ノ志氣如何ヲ視ルコト足レリ。阿部安邊ヲ貪ルモ
ノハ、獨リ明時ノ廢物ノミナラズ、亦尚齋ハ罪人ナリ。

貝原篤信益軒ト號シ。河津ノ人。國主黒田侯ニ仕テ。寛永七年ヲ以テ福岡城中ニ官舎ニ生ル。篤信幼ヨリ學敏ニシテ殊實ナリ。中年ニ及ビ。京師ニ入テ講學ス。都下ノ名彦若クナ心ヲ傾ケテ之ニ下タル。博學洽出。以テ名海内ニ重シ。篤信好ムデ書ヲ著ス。而シテ世ヲ救ヘテ實ニ善ニ思ハシ。其著スル所。百有餘種。多ク書スルニ國字ヲ以テテ語極其懇切ナリ。田、畷、弘、女、童、京、津、卒、皆ナ之ヲ便トス。又稱生ニ善シ。老ニ至テ猶ホ矍鑠トシテ衰ハス。其屬綴スル所ノモノ少ナカラズ。六十二シテ和漢名數増補ヲ作り。六十七ニシテ大和廻リヲ作り。七十四ニシテ筑前續風土記。及ビ點倒ヲ作り。七十五ニシテ諸家譜ヲ作り。七十九ニシテ人

和未列ヲ作り。八十一ニシテ和樂訓ヲ作り。八十有二ニシテ養生訓ヲ作タル。其著アルトコト曰ク。讀思錄ニ謂ク是ナリ。ホテリ曰ク。魏志ニ曰ク。胡昭怡々トシテ愛重リ。無列。僕隸ト雖ドモ必ズ禮ヲ加フ。年八十ニシテ書楷ハ倦マザル者。胡徽君ニ於テ之ヲ見ルト。篤信謂テ久。胡昭愛敬ノ度量及於可カラズ。以テ法ト爲ス可シ。八十書ハ請ムヲ倦マザル也。ガ如キハ。吾意蓋ナリト雖ドモ。亦外日矣。手卷ヲ釋カズ。是レ企及ス可シ。爲スト。此レ篤信自ラ其實ヲ絶スルナリ。篤信ノ人又生謙恭純篤ナリ。其言ニ曰ク。吾幸ニ衆利ノ後ニ生レテ。其書ヲ窺フコトヲ得無窮ハ幸又聞。推ノ思ト謂ク。可キナリ。故ニ吾其之ヲ敬スル神助ノ如ク。之ヲ信スル善處ノ如シト。蓋シ其學。初メ陸象山王陽明ノ說ヲ取リ

後、未幾、學一歸依セシヲ以テナリ、滿年八十五ニシテ没ス。其子曰久近、世々人、四十五十二至レバ、毎々自ら老ヲ稱シテ百歳爲ス能ハサルモノ、如クシ、軀強、神氣、人、氣象、無ク、徒ニ給養ヲ兒孫ニ託ス。若、速ニ死ス、天、機、ヲ、夫レ人生ハ、僅カニ三萬六千日、而シテ、年七十ニ至リ、得ル者、古來稀ナリトセバ、年弱冠ヲ遇、ザル際、幼少ナリトシ、四十ヲ踰ユレハ、老衰ナリトシ、其事業ニ成就スルノ日月、數ナク、止マル者トスルカ、何ゾ自任ズルノ志ニ乏シキヤ、不幸ニシテ、疾病事故アル際セバ、一事一業ヲ成サズシテ、州木ト共ニ枯朽センク、聞久、歐洲ノ人、年六七十大ル者、數人相會ス、ケ、アリ、氏、語次一モ、身體衰弱ノ事ニ及

ガ無シト、我邦人ノ老者相逢フテ、晤語スレバ、必ズ死ヲ待ツノ用意ヲ説クト、全ク反對セリ、是素ヨリ平素攝生ニ意ヲ注ガ、中ヨリ、眼昏ク、齒豁ク、身曲カリ、脚重キニ至リ、易ク、嬰樂タル者少キニ由ルナル可シト、雖、氏、抑モ亦其習俗ノ然ラシムル所、老テ猶ホ勉ム可キ者ト爲サ、ルニ由レリ、篤信其人ノ如キ、博學洽聞、海内無比ト稱セラレ、モ、自ラ足レリトセズ、年八十二至テ、手恆ニ卷ヲ釋カザリシハ、歐洲ノ博士學匠ニモ蓋ダザル可シ、且、其、朱子ニ於テ、無窮ハ、幸罔極ノ恩アリトシ、之ヲ敬スル神明ノ如シト云フ者、今ノ書生ノ其學未ダ熟セスシテ、輒ク人ノ短ヲ拾ヒ、以テ口實ト爲シ、先覺者ヲ是非シテ、嘖々スル者ニ比スレバ、月、蓋、霄壤、帝、ナリザルナリ。

原尚恭ハ京都ノ人ナリ。享保三年ニ生マレ、年五十ニシテ没ス。儒ヲシテ醫ヲ兼ネ。清國ノ語ニ通ズ。醫ヲ以テ土井候ニ仕テ尚菴幼ニシテ雋異十歳ニシテ章句ヲ伊藤東涯ニ受ク。漸長シテ學ヲ嗜ム。此湯ノ如シ。口誦手録。其發セズ。必母内々之ヲ奇レシテ。其或ハ疾ヲ得ルヲ過慮ス。謂テ曰ク。惟下シ憤リヲ發スルハ成人ノ事ナリ。兒今童年。惟學問斷無クシテ可ナリト。尚庵曰ク。發起シテ文字ヲ尋思ス。心下暴爽ナルヲ覺テ稍晏レバ。則チ頭昏々トシテ心裏甚タ安カラズト。其長ズルニ及ビ。博學能文。家資亦頗ル富ムニ至レリト云。

櫻所子曰ク世ノ學業刻苦スル者問之ガ爲メト來テ願

之。遂ニ救藥ス可カラザルニ至ル者アリ。是其軀幹ノ柔弱ニ由ルモノナルベシト。雖凡抑モ亦々學ニ苦ム。未ダ學ヲ嗜ムニアラザルヲ以テナリ。尚庵ノ如キハ學ヲ嗜ムノ深キ者ト謂テ可シ。諸ニ言フ之ヲ嗜ム者ハ之ヲ爲スノ巧妙ナル者ナリト。尚庵ニ於テ我モ亦言フ。

第十一 津維顯顯遊戯ヲ好マサリシ事

津維顯顯琴所ト號ス。近江ノ人ナリ。井伊候ノ世臣タルヲ以テ琴所亦歳十四ニシテ祿三百石ヲ饒テ近侍ト爲ル候ニ從テ江戸ニ在ル三年。元禄中疾由テ致仕シ。京都ニ遊學ス。門ヲ杜夫客ヲ謝シ。書ヲ誦シカ學スル。七八年中。年及ビ。松雨亭ヲ彦根城ノ南松寺村ニト築シ。徒然歌ト書ヲ講ス。衛門ニ棲遲ス。雖凡從遊ハ盛ナル。未ダ嘗テカラザ

ヲ以テス其聲ヲ勵シテ自ラ答フル者間詰ヲ爲シテ貴重ノ光陰ヲ消費センコヲ懼ル、ノ切ナルヲ見ルニ足レリ。而シテ其主人自答フ何ノ偽リカ之レアラント云フセム亦敢テ構思以テ人ヲ欺クコトヲ爲サズ其易直、性質ヲ想像スルニ堪タリ世ノ名ヲ交際ニ托シ飲酒博局ヲ事トシテ分寸以テ黄金ニ値タヒスベキ光陰ヲ徒消スルヲ愛マズ而シテ勳モスレバ不在ト稱シテ巧ミニ來客ヲ謝スルガ如キ爲ス所全ク蘭臺ト反對シテ其怠惰ト不信トヲ表スルニ足ルモノ、ミ

第十三 伊藤莊治古語ヲ壁ニ貼シテ自ラ警メシ事
伊藤莊治ハ錦里ト號ス。播磨赤石ノ人ナリ其祖坦庵其父龍洲共ニ儒ヲ以テ名アリ錦里家庭ニ學ビ紹藝ヲ以テ發

トニ都門ニ著聞ス蓋シ其父祖ヨリ三世箕裘相繼ギ後進ニ領袖タルヲ以テ之ヲ奉崇スル者尤モ衆ホシ錦里資性慎重ニシテ名ヲ好マズ謁ヲ請フ者アリト雖ハ贊ヲ執ル者ニ非レバ概シテ之ヲ謝絶ス以謂ラク博交泛遊人皆其名ヲ好ムガ爲ナリト其越前侯ニ仕フル殆ンド四十餘年數江戸若クハ福井ニ祿役スト雖氏奉職惟レ謹ミ外交ヲ爲サズ其休暇シテ京都ニ在リ經義ヲ講説シテ徒ニ授クルニ當テ足闕ヲ履マズ習俗應酬ノ詩文ヲ爲クラズ而カレ氏其名ハ遠ク時輩ハ騷雅博交ヲ以テ藝苑ニ鳴ル者ハ右ニ出タリト云フ錦里居ル所ノ室壁上ニ志七不忘在溝壑ハ孟子ノ語ヲ書キ以テ自ラ警メ常ニ子弟ニ訓ヘテ曰ク士タル者ハ此ヲ念ハザル可カラズト

櫻所子曰ク、善イ哉、錦里ノ送交ヲ謝絶シテ且ツ常ニ自ラ
 警ムルヤ、馬場美濃守ガ、戰場常存ノ四字ヲ書シテ壁頭ニ
 掲ゲ平生自ラ警メシハ、則チ勇士ハ其元ベヲ喪フヲ忘
 レザルナリ。本庄因幡守ノ封侯ヲ得テ後々青錢五十文ヲ
 緡一貫キテ柱上ニ懸ケ、三本入ノ扇子箱之事ノ九字ヲ書
 シテ壁ニ貼セシハ、實ニ居テ賤ヲ忘レザル爲メニ設ケシ
 ナリ。本庄因幡守家俊ハ、登庸セラレテ侍從ニ任ジ、控間ニ
 家俊、恭儉ニシテ、慎重ナリ、便ニ朝餐ノ後、其夫人ヲシテ
 茶三碗ヲ供セシメ、且ツ識テ曰ク、今日富貴ナリト雖也、
 必ク、最時來微ナリシ時ヲ遺忘スベク、又三本入ノ扇子箱
 之、事ト書キテ、クハ、我處ニ貼付セリ、親友或時其故ヲ問
 フ、家俊答ヘテ曰ク、我處ニ貼付セリ、親友或時其故ヲ問
 教命アリシヲ以テ、三本入ノ扇子箱ニ、二條家ノ家士ノ宅
 ニ、齋ヲシテ、謝儀トセシト欲シ、柳影堂ニ至リ、扇ヲ買ハ
 フトスルハ、囊中僅カニ五、十文ノ錢アルニ、此錢一ヲ買
 フヲ得、ハ、ヤト五、扇鋪ノ主人、既ニ我が身索フ知リタハ

ヤ、扇ハ、價ニ、此、時、我ハ、關、東ノ、威、光、斯、ク、ノ、如、ク、ナ、リ、者、カ、ト
 ナシト云フ、今ハ富貴ニシテ、錢ト云ヒ、扇トイフ者、亦、奢ニ
 知ラサルニ至リ、木ヲ忘レテ、君恩ニ背キ、自家モ亦、奢ニ
 流ル、一、ア、テ、シ、ヲ、懼ル、故ニ、曩日ノ、事ヲ、記念シテ、忘レサ
 ガ、爲メニ、性ニ、杜、頭、壁、上ニ、掲ケテ、日ニ、進ルヲ、要スル所
 以ナリト、譯ラ、世ノ志士タル者、恒ニ、溝、壑ニ、在ルヲ、忘ル、
 レシト云フ、
 一、ヲ、懼レ、空聲虚譽、泛利淨榮ニ、奔、競スル、一、ヲ、爲サズンバ、
 以テ、其志ヲ、挫ギ、其節操ヲ、撓ハメテ、廉耻ノ、何事タルヲ、顧
 ミス、人ニ、向テ、憐ミヲ、乞ヒ、脅肩、諂笑スルノ、醜態ヲ、現ハス
 一、無キヲ、庶幾ス可シ、然リ而シテ、豪傑ノ、士ト、雖也、逢フ所
 ノ、境ニ、隨テ、或ハ、其心志ノ、變移スル、無キ能ハス、故ニ、錦里
 ノ、爲ス所ノ、如キハ、頗ル、初志ヲ、保、續シテ、馬、勉、斯ニ、從、事ス
 ル、タ、メ、ノ、良、策ニ、シテ、馬、場、本、庄ニ、氏、ノ、爲ス所ト、暗合セル
 亦、奇ナラズヤ、

第十四 加々美光章線香ノ光ヲ以テ書ヲ讀ミシ事

加々美光章ハ櫻橋ト號ス。甲斐國山梨郡ノ祠官タリ。如ク
リ學ヲ好ミ、國典ハ言フヲ待タズ、儒經釋典、天文曆數、算術
等、通曉モザルハ無シ。國風ハ風竹亭ノ翁ヲ師トシ、文學ハ
三宅尚齋ヲ師トス。初メ、家貧ニシテ、油ヲ焚クハ、資無シ之
ヲ以テ、線香ヲ燒キ、其光リヲ假テ書ヲ讀ム。業成ルニ及テ、
名聲四方ニ聞エ、其門ニ遊ブ者甚ク多シ。光章天性勤勉ナ
ル。既ニ此ノコトク、加フルニ、氣質温厚ニシテ、行ヒ篤敬ナ
ルヲ以テ、一言ヲ交ユルモノト雖、歸服景仰セザルハ無
カリシト云フ。

櫻所子曰ク、光章ノ學業ニ、匪勉セ、ル車胤、孫康ニ比スルモ、
亦敢テ慚色無シ。高堂ノ銀燭、明カニシテ、書ノ如ク、唯、笙歌

ヲ照シテ書ヲ照ラサズ、或ハ雪ヲ積ミ、螢ヲ聚メ、或ハ線香
ヲ焚キ以テ書ヲ照ス、其勞逸若樂、相去ルト遠シ、然リト雖、
凡其結集ニ就テ對較セハ、高樓置酒シテ、銀燭舞裙ヲ照ス
ノ逸樂ヲ事トスル者、或ハ破産喪家ニ至リ、芸窓ノ下書ヲ
讀ムデ、僅カニ凍餓ヲ免カル、ノ勞苦ヲ憚ラザル者、他年
或ハ高蓋四輪、大達ニ來往スルノ富榮ヲ取ル、古人言ヘル
トアリ、曰ク、難キヲ先キニシテ得ル、ト後チニスト、世ノ
得ル、トヲ欲シテ難キヲ辭ヒシトスル者、省思セズンバ、ア
ルベカラズ。

第十五 神屋彌左衛門文武ニ熟通セシ事

神屋彌左衛門、毅齋ト號ス。筑前福岡侯ノ世臣ナリ。著スル
所、歸義吟、艸ニ卷アリ、其託スル所ニ據テ視レバ、同僚ノ士

病ニ東邸ニ卧シ候駕ニ從テ歸ルヲ得ズ。侯殺齋ヲシテ看
 護セシム。他日其病痊ヘ相伴テ西海ニ歸ル時ノ紀行ナリ
 歸程鎌倉江ノ島等沿途ノ勝概ヲ遊觀シ之ヲ詩ニシ之ヲ
 文ニス。其懷古弔舊スル所史傳ニ涉リ議論ヲ加フ。其人ノ
 文ニシテ武ナル。儒ニシテ釋ニ通ズルノ一班ヲ知ルニ足
 レリ。即チ卷初二四分律一釋典ノ名一膽病ハ五功德ヲ舉
 ゲ。枕綱經ハ福田中看病ヲ第一トスル。一ヲ述アルカ如キ
 是ナリ。而シテ其詩其文亦卓然トシテ一家ヲナセリ。卷首
 享保戊戌夏宅觀瀾ノ序同庚子夏四月物祖徠ノ序正徳乙
 未歲釋大潮ノ序アリ。觀瀾曰ク其覽ノ富識ノ偉辯ノ雄ニ
 シテ文ノ宏且ツ暢ナル。固ヨリ優然トシテ以テ通邑大都
 ニ坐シ絳帳ヲ褰ケテ青衿ヲ導ク者ト。相周旋下上スルニ

是ハ里久一郷ノ士ヲ以テ之ヲ視ルベキニ非ズト。又曰ク
 雲天千里首ヲ翹ケ悠々トシテ徒ニ其名ヲ仰テ親ク其誨
 ヲ受クルヲ得ス。是恨ミトスベキナリト。徠曰ク蓋シ其
 人文武自ラ負ヒ經生ヲ以テ自ラ見ズ。百氏ニ馳騁シ千古
 ヲ凌厲シ。玄ヲ出テ釋ニ入リ奇正雲湧ス。其才洵ニ測ル可
 カ。天ズト。又曰ク然レ此レ彼レニ徠クヲ得ルナシ。彼レ
 來ル能ハス。谷天ニ乾繫ス。徒ニ其眉宇ヲ此編ニ想フ。恨々
 タラザル可ケンヤト。大潮ノ序ニ曰ク其言ヲ觀其安シ。ス
 ル所ヲ察スレバ益シ神氏ハ求メ蘇長公ノ流亞歟。既ニ武
 亦儒亦釋其學ニ非ルハ無シ。吾之ヲ吟誦ニ知ルト。序者三
 人皆當時ノ英俊ニシテ各推獎ヲ極ムル。此ノ如クナル
 亦以テ殺齋が傑出ノ人タルヲ知ルニ足レリ。而シテ卷

中自ヲ勤年ヨリ研學セシヨヲ叙ス亦以テ其刻苦勉強終
ニ造詣スル所アルヲ見ルベキヲ以テ煩ヲ憚カラズ左
之ヲ抄出スヘシ即チ吟州上ニ曰ク憶フ予年十五六家貧
ハシテ書ヲ嗜ム一書ヲ得バ則チ拜戴シテ珍寶ヲ後
カ如クシ披覽寢食ヲ忘ル既ニシテ微官ニ奔走シ屢東都
ニ迄ル書肆某ト歎齋ナリ暇アレバ則チ書肆ニ入り閣上
ニ坐入四壁細帙磊落楮ニ充ツ意ニ隨テ抽出シ仰テ讀ミ
確シテ思フ猶飢ユレバ懷中ノ持飯ヲ取テ之ヲ喫ス其樂
ミ食前方丈侍妾數百人ト雖正易エケルナリ歸ルニ臨ミ
必ズ書一帙ヲ借リ携ヘ歸ル晝間塵冗率キ卷ヲ終フル能
ハズ夜ニ入テ長讀且ニ達シ尚ホ手ヲ釋クニ忍ビズ云々
ト

櫻所子曰ク享元ノ世圭運動興シ人文・湖嶽ガリ而シテ
龍騰鳳翥名ヲ後世ニ垂ルナリ其名ハ高キ其實ニ過ク
ルアリ學問文章志氣節操兼不備ナリ其名ハ煙滅シテ聞
ユルコト無キアリ華光隱徳ノ士巖穴ニ老死シ世ヲ罪ナ
リマテ人ノ之レヲ知ルヤ和漢其例多ク黃鐘棄擲セテ
レテ瓦釜雷鳴スルハ古今社會ニ通患ナリ刻苦力學送張
ニ潛居シ坎軻身ヲ終テ毅齋ノ如キ其人ナリ然リト雖元
ニ卷ノ吟州彩華ヲ煥發シ三人ノ知己ヲ得テ榮光益灼カ
ナリ毅齋ガ平素勤勉ノ効亦夕空シカラスト謂フベシ

第十六 中西雜寧恆ニ寢ニ就ク丁無カリシ事

雜寧通稱ハ曾七郎參河ノ人ナリ尾藤竹腰氏ニ仕テ雜寧
弱冠ニシテ學ニ志シ暗室ニ坐スルヲ好ム白晝下雖トモ

戸ヲ閉テ僅カニ窓光ヲ照シテ書ヲ讀ミ夜ハ燈燭ニ對シテ
毎ニ鶏鳴ニ至ルマテ几ニ墜テ坐睡ス以テ平土ノ爲ニ
寢就カク無シ歳三十二至ル弟子日進門遊
者數十百人幾モ熱クテ名護屋ニ移ル寛延中其上行
腰六ニ從ヒ江戸ニ赴ク竹腰氏ノ邸ニ赤阪門外ニ在リ維
摩利官舎ニ寓ス來テ業ヲ請フモ其聲カトテ以テ
達ニ命ジテ邸ヲ出テ都ト寓居セシム博ク四方ノ士
ニ教授スルタリニ費銀ヲ賜與ヒテ此ニ於テ講堂ヲ建
三島坊ニト築シ叢桂舎ト云フ竹腰氏事ハハ則チ史ヲ
シテ之ニ就テ名問セシム議政ノ事ニ非レバ敢テ召サズ
召セハ必ス駕ヲ以テ思遇太々厚ク而シテ四方ノ士風
一掃ニ輻湊シ其聲譽時ニ聞ク維寧敦厚沈黙人ヲ競ハス

交遊極テ予寡ク盛名有リト雖凡行ヒ本ニ中ラサレ者ハ
辭シテ送テ見ルナシ恆ニ祭節ヲ以テ人ヲ酬ケマス其涵
濡ノ化自然ニ門人ニ及ビ其オチ育シ徳ヲ養フ即チ博綜
練達驚東柯ノ如キ雅量淹通飛圭洲ノ如キ其敏廉節河天
門ノ如キ篤學謹行紀平洲ノ如キ信直直諫伊東寢峯ノ如
キ皆ナ得易スカニサル所ニシテ世儒ノ偏ニ文藝ノミヲ
以テ後進ヲ歎動スル者ト適カニ異ナリ維寧病篤キニ至
リ弟子ヲシテ之ヲ扶起スルノ几ニ墜テ尚ホ講ヲ數ノス
將サニ起サラントスルヲ知リ筆ノ所ノ著數本ヲ舉ケ
テ悉ク之ヲ燒カシム弟子皆之ヲ惜ム乃チ白ク未定ノ書
ナリ恐クハ後世ヲ誤ラント惟ニ文集十三卷ヲ以テ之ヲ
紀平洲ニ屬シ遠ニ寶曆二年七月ヲ以テ芝三島坊ノ寓ニ

歿ス。歳四十四。弟子多ク心喪ヲ服ス。ト云フ。二、
櫻所子曰ク、維寧ノ學ニ志シ、凡ニ隱居坐睡シテ寢ニ就カ
ザリシヨリ、其病篤キニ及ビ、尚ト凡ニ隱居テ講ヲ輟メザリ
ト云フ者、其少ヨリ死ニ至ルニテ、萬志力學、終始一ノ如
クナルヲ見ルニ足レリ。然而ニ各節ヲ以テ人ヲ勸マシ
シ、交ヲ結マズ、筆スル所ノ著、數本ヲ燒クガ如キ、其敦厚恭
謙ナルノ一斑ヲ窺フニ足レリ。宜ナル哉。一時ノ名儒多ク
其門ヨリ出テタリシ。今世ノ學者、其篤志力學、尋常ニ超
出スル所無クシテ、聲譽ヲ一世ニ馳ヒ、トハ、猶ホ貨物ヲ
有スルノ冬カラズシテ、貿易市場ニ巨利ヲ攫セントスル
カ如シ。假令之ヲ得リモ、一時ノ虚名空譽ノミ、スク持シ、ト
キモノニ非ズ。

第十七 蘆野孝七郎幽囚セラレテ書ヲ著セシ事

孝七郎ハ東山ト號ス。元祿九年、陸奥ノ磐井郡、澁井村ニ生
マル。家世農桑ヲ業トス。東山四五歳ニシテ、柳史ヲ見ルヲ
好シ。九歳ノ時、桃井素忠ニ從テ、句讀ヲ受ク。一年ニシテ、四
書五經ヲ讀了ス。稍長ズルニ及ビ、仙臺ニ遊ビ、富商大和屋
久四郎ノ家ニ寓ス。江戸ノ人吉田需軒ト云者、仙臺ニ遊ビ、
惟ヲ下ダシテ生徒ニ教授ス。東山從テ其講ヲ聞ク。五年、
又京都ニ遊ビ、業ヲ三宅尚齋ノ門ニ受ケ。又長崎ニ之キ講
説シテ、徒ニ授ク。其名稍諸儒ノ間ニ顯ハル。仙臺中將吉村
遙ニ召シテ、儒官ト爲シ、祿若干ヲ賜フ。時ニ年二十六。東山
府學ヲ設ケンコトヲ建議ス。富商鈴木八郎左衛門、其事ヲ聞
キ、金ニ萬兩ヲ出シテ、興造ノ費資ヲ助ケン。ト請フ。八郎左

衛門ハ嘗テ東山ニ學ブ者ナリ。東山之ヲ大夫ニ言フシ。遂ニ國侯ニ上疏ス。侯之ヲ許可シ。經營區畫各壯大ヲ盡クシ。椽栴碣瓦皆宏麗ヲ極ハム。三年ニシテ成ルヲ告グ。區シテ明倫堂ト曰フ。仙臺府學ノ盛ナル諸藩ニ過グルモノ。其端ハ實ニ佐久間洞巖ト東山ハ創始スル所ナリ。東山資性剛直ニシテ權要ヲ避ケズ。嘗テ學舎ニ於テ諸有司ト其班次ノ高卑ヲ争フヲアリ。東山捍言シテ曰ク。經筵ノ習儀ハ卿等ヲ待タズ。執法大夫ト雖モ此事アル無シト。有司答フルヲ無クシテ去ル。後チ之ヲ啣ミ。効スルニ藩制ヲ侮蔑シ。舊典ヲ遺棄スルヲ以テス。遂ニ之ガ為メニ坐セラレ。加美郡宮崎村石母田長門ガ邸中ニ幽囚セラレ。其囚所ニ在ルヲ二十四年赦ニ遭フテ郷里ニ放歸ス。時ニ歲六十六。東山ノ

幽囚ニ在ルヤ憾ムル所アリテ無刑録十四篇ヲ著シ。幽囚官ノ遺意ヲ述ブ。後チ其書世ニ傳フ。識者稱シテ深意アリト爲スト云フ。東山晩年又仙臺ニ遊ビ。生徒ニ教授ス。安永五年歲八十一ニシテ歿ス。櫻所子曰ク。東山邊土僻陋ノ農家ニ生長シテ。學ニ志シ。千里笈ヲ負フテ良師ヲ求メ。汲々トシテ倦怠スルヲ無ク。幽囚セラレ。一廿四年。又敢テ屈撓ノ色無シ。書ヲ著シ。道ヲ講。鐸ヲ一方ニ振フ。其篤志力學知ルベキナリ。其耐忍剛毅思フベキナリ。今日ヲ以テ昔時ト對較セバ。善籍ヲ購求スルモ。師ヲ求メテ旅行スルモ。舟車ノ便否。道路ノ險夷。相距ル丁果シテ如何ゾヤ。苟モ篤志力學。敢テ怠懈セズ。ノバ。邊郷僻地ト雖モ。其便ハ昔時都府ニ生レタル者ト殊ナル。

無カラン。然レバ則チ勞苦ハ、東山其人ニ半バシテ、功ハ必
ス之ニ倍セン。

第十八 石多仲曆子一冊ヲ廁中ノ壁ニ糊塗ヒシ事

石多仲ハ瀨濱ト號ス。與州瀨ノ上村ノ貴家ニ生ル。幼ニシ
テ學ヲ好ム。長ズルニ及ビ、江戸ニ遊ビ同地方ノ人ナルヲ
以テ、餘熊耳ニ學ブ。瀨濱熊耳カ並ニ寓スル十年。日夜誦讀
シテ念ヲズ。其凡ニ對スル。坐下足音々所爲メニ穿ム。又毎
年臘月ニ至レハ、必ズ曆子一冊ヲ買ヒ、之ヲ廁中ノ壁上ニ
糊塗ス。其記性モ亦人ニ過グ。廁ニ之ク一十二次ニシテ來
歲十二月ノ支干ノ運動時令ヨリ、晝夜ノ短長、節氣壯相ニ
至ルノ事ヲ暗記ス。而シテ後チ其糊ヲ去ル。以爲ク曆子ヲ
展卷スル。廁ニ之クノ間ニ在ルトキハ、別ニ寸晷ヲモ費サ

ス。ト年二十九ニシテ、惟ヨ之ノ三田ニ下タス。生徒稍集マ
ル。其名時ニ顯ハレ、業將サニ大ニ行ハレシトス。歲三十八
ニシテ、疾ヲ病ムテ歿ス。時寶曆八年ナリ。

櫻所子曰ク、瀨濱東奥ノ一村落ニ生長シ、其學ニ志シテ都
門ニ留寓スル。廁ニ上ホルノ間モ、敢テ光陰ヲ空フセズ。且
ナル哉。其業將サニ大ニ行ハレシトスルニ及ベル。惜ム
ラクハ、天之ニ年ヲ假サズシテ、大成ニ至ラス。然リトイヘ
ドモ、其他學怠ラザリシハ、以テ後進ノ標準ト爲ス可キナ
リ。

第十九 莊田静志ヲ立テ忠誠ヲ以テ自ヲ勗メシ事

莊田静、琳菴ト號ス。少フシテ谷一齋ニ從テ學ズ。志ヲ立テ
忠誠ヲ以テ自ヲ勗ム。僅カニ弱冠ニ踰エ、其學既ニ通シ。尤

モ談論ニ長ス、龜山侯（松平伊賀守忠晴）ニ夕ヒ其通鑑
綱目ヲ講ズルヲ聞キ之ヲ喜ズ、祿百五十石ヲ以テ之ヲ聘
ス、琳菴起テ之ニ應ジ、仕ヘテ侍讀トナル、歲二十八、琳菴夫
資溫柔、退然トシテ、衣ニ勝ハザル者ハ、若シテ人ト得
失ヲ論辯スルニ至テハ、吐欬語、責利害ヲ避ケス、譽諤ヲ以
テ人皆之ヲ忌憚ス、遂ニ奸人ニ讒州スル所ト爲リ、因固ニ
下タル嘗テ獄吏問、卷ヲ著ス、經史ヲ譜記スル數千言、
一字ヲ舛マラス、獄ニ在ルコト四年、延寶二年十月ヲ以テ
棄市セララル、

琳菴才識淵茂、常ニ學者ノ志アリテ、行ヒ未ダ果斷ナラ
ザル者ニ説テ曰ク、學ハ當廿ニ水ヲ習フガ如クスヘシ之
ヲ淺處ニ習ヒ、而シテ後チ深キニ向テ、没溺シテ死ヒ、ト
欲スル者、救次方ニ始メテ功ヲ見ル、若シ其溺ル、ヲ懼レ
テ、淺處ヲ離レ得テ了セザレバ、終身水ニ在リト雖、亦數
尺ノ水ヲ游泳スルヲ能ハズト、

櫻所予曰ク、神原望洲人言ニ曰ク、天下ノ技藝、各四時、ア
リ、一ニ曰ク、下手、二ニ曰ク、功者、三ニ曰ク、上手、四ニ曰ク、名
次、上下三千年、縱橫一萬里、存スル所此ニ出テス、學者ノ道
ニ、恭ケルモ亦然リト、琳菴ノ所謂終身水ニ在リト雖、トモ
亦數尺ノ水ヲ游泳スルヲ能ハザルハ、下手ナル者ナリ、泳
ヒテ能ク數里ノ波濤ヲ凌グ者ハ、上手ナル者ナリ、而シテ
其下手タリ上手タル所以ノ本ハ、他ナシ、没溺セントスル
ヲ懼レテ淺處ヲ離レ得ザルト、敢テ淺處ヲ離レテ深キニ
向フトニ由ル、夫レ安佚ハ淺處ナリ、辛苦ハ深處ナリ、辛苦

伊藤嘗シテ凍餓セシトスル者數次ニ至ルガ如クシバ、其方ニ始メテ功ヲ見ルヲ得ルヤ必セリ、然ルニ今世ノ學術技藝ニ志ス輩、多クハ其衣ハ麗ヲ欲シ、其食ハ鮮ヲ求メ、而シテ大ニ得ル所アラント欲ス、我恐クニ終身學術技藝ニ從事スト雖、所謂下手ナルヲ免カ、ハラシト又、何ツ名人若クハ上手ノ地位ニ達スルヲ得、況ヤ躁進ヲ戒ムルヲ知ラス、已レガ學ビ得タル所ヲ誌ラントスルニ急ナルヲヤ、苟モ其學ビ得ニ於テ、上手ト呼ビ名人ト稱セラレシトヲ望マバ、須ラク没溺シテ死セント欲スルニ至ル、辛苦艱難ヲ辭ス可カラザルナリ。

第二十 細井德民篤志力學ニ由テ德望ヲ得ク事

德民平洲ト號ス、享保十三年、尾張ノ南鄙平洲村ニ生ラレ、家

世農ヲ以テ業トス、平洲幼ニシテ讀書ヲ好ミ、歲十七ニシテ、京都ニ遊學セシト、請ヒ、單身ニシテ之ニ赴ク、伊勢ノ人北畠世規ト云者ト、舍ヲ同フシテ僑居ス、垢衣弊帶、糲ヲ食ヒ、蔬ヲ嚙ミ、務メテ費用ヲ儉ニス、是ヨリ先キ父正長之ガ爲ニ金五十兩ヲ與ヘ、其用ニ適ヒシム、京ニ在ルト、一年十兩ヲ費消ス、其餘ヲ以テ書數百卷ヲ購得シ、歸期ニ及ビ、兩馬ニ馱シテ還ル、郷里皆以テ之ヲ美談ト爲ス、平洲ノ京都ニ遊學スルヤ、遍ク諸儒ニ詣ルニ、學識品行ノ師資トス可キ者ヲ見スシテ乃チ郷ニ歸ル、父母其持操ト勉學トヲ喜ビ、將サニ田宅ヲ分ツテ生理ヲ爲サシメントス、平洲可カズシテ曰ク、願クハ二百金ヲ得テ、兒ガ欲スル所ニ從ハシ、乃チ之ヲ許ス、盡ク書ヲ買テ之ヲ讀ミ、足戶外ニ出テザ

此ニ一年自ラ謂フ是レ吾カ師トスル所ナリト。延享
 中、參河ノ元淡淵始メテ名護屋ニ來テ生徒ニ教授ス。平洲
 往テ之ニ謁シ、相與モニ經史ヲ商推シ、大ニ其學識ト品行
 ハニ服ス。以爲ク師事ハ人ヲ得タリト。淡淵稱シテ以テ、
 ガ業ヲ羽翼スル者ト爲ス。平洲廿四歳ニシテ、惟ヲ名護屋
 ニ下ダシテ教授ヲ業ト爲ス。幾クモ無ク江戸ニ至リ、芝
 寓ス。淡淵歿スルニ及ビ、其門ハ諸子皆ナ。平洲ノ門ニ入
 平洲ハ名娼テ、江湖ニ嘖々タリ。平洲江戸ニ教授スルニ十
 年許リ。講業ノ盛ナル殆ンド虚日無シ。出テハ則チ列侯ノ
 ノ講筵入テハ則チ在塾ノ子弟ヲ教育シ、惟レ日足ラズ。帝
 ニ經學文章、ミナラズ、世稱スルニ其人ノ經濟ニ長スル
 ヲ以テス。王侯貴紳請テ以テ師ト爲ス。或ハ重祿ヲ以テ之

ヲ召ス。ト欲スル者アレバ、辭シテ仕ヘス。私心窮カニ謂
 ラク、已ムコト無クシバ則チ仕ヘシ。尾ハ我が墳墓ノ在ル所
 ナリ。仕フレバ則チ豈他アラシヤト。年五十二ニシテ尾侯ノ
 召ニ應ジテ侍讀トナリ。督學ヲ兼ネシメ、田祿四百石ヲ賜
 フ。平洲尾藩ニ督學タリシヨリ、國ノ耆儒及ヒ弟子若干人
 ヲ薦メテ學職ニ充ツ。國中ノ民皆來テ教ヲ受ケザルナシ。
 學政大ニ振ス。之ヨリ先キ、平洲年四十四、米澤侯上杉治憲
 ノ聘ニ應ジテ、其國ニ往ク。侯聰明ニシテ志ヲ政治ニ專ラ
 ニシ。平洲ヲ尊ムテ賓師ト爲シ、禮待優渥ナリ。其言ヲ嘉納
 シ、藩弊ヲ洗滌ス。留リ居ルコト一年ニシテ歸ル。關境北隣、雅
 然トシテ風ニ嚮フ。安永中、米澤ノ國學興讓、新藤成、侯
 再ビ平洲ヲ其國ニ招キ、得失ヲ詢謀シ、政刑ヲ參定ス。又平

洲、封内ニ遊行シ、使役ノ煩劇ト、民間ノ疾苦トヲ覆檢シ、百廢悉ク舉ガリ、豐施下ニ遍テシ、衆民大ニ悦ビ、平洲カ途、過タルヲ見、感歎シテ淚ヲ垂レ、拜跪合掌シテ、大慈大悲ノ活如來様ト謂フニ至ル、亦留ル一年ニシテ歸ル、是ヨリ後ナ米澤封内治教ノ績、海内ニ顯聞シ、稱シテ當時ノ第一ト爲ス、此ノ如クナルヲ以テ、平洲脫年ニ至リ、學識徳望並ビ高ク、世ノ所謂儒者ニハ非ルナリ、凡ク王卿侯伯、每ネニ平洲ト語ル、必ズ人ヲ屏ケテ時ヲ移ス、或ハ書牘ノ來ル、讀ミテ、其ノ多クハ手紙カラ之ヲ焚ク、蓋シ其封國米邑ノ政令、綱紀機密、及ビ政事典型、必ズ豫ク知ルアリ、然レドモ口ヲ閉シテ一モ言ハズ、病革ナルニ及ビ、書牘數十通猶小篋ニ在ル者ハ、門人ニ遺言シテ、悉ク之ヲ其主ニ返入、是ヲ

以テ家人ト雖モ、其詳カナルヲ知ル能ハザリシト云フ、櫻所子曰ク、我邦門地ヲ以テ爵祿ヲ世襲スル、外邦ノ天爵アル者、布衣ヨリ起テ王侯ノ師トナルヲ得ルガ如キニ非リシナリ、然ルニ平洲尾ノ南鄙ニ生レ、畎畝ノ一匹夫ニシテ、而シテ其篤志力學、孜孜トシテ怠ラザル、遂ニ公侯縉紳ノ賓師トナリ、若クハ其顧問ニ備ハリ、有上ノ大諸侯モ、優渥ナル禮待ヲ以テスルニ至リ、其言行ハレ、其計用キラレ、澤衆民ニ及ブ、何ゾ其盛ナルヤ、況ヤ今日材能ヲ以テ爵祿ヲモ取ルベク、事業ヲモ興ス可キノ昭代ナルニ於テ、後進ノ士、平洲如地下ニ令笑スル所トナル、無カラシヲ勉メヨ、

第廿一 並川弥右衛門論語ヲ讀ムヲ聞キシ事

並川弥右衛門。享保時代ノ人ニシテ。丹波並川村ニ生ル。
山城鳥羽ニ出テ、米商ヲ業トセリ。其子五一郎幼キ時。人
ヲ雇フテ四書ノ素讀ヲ為サシム。一日論語ノ吾黨ニ躬ヲ
直ッスル者アリノ章ヲ讀ムヲ聞テ曰ク。是レ太ダ性ハ直
キトナリ。子トシテ父ノ惡ヲ發バク。何ゾ直シト謂テ得
ヤト。次ニ孔子ハ吾黨ノ直キ者ハコレニ異ナリノ言ヲ
聞キ。理宜ク此人如クトルベシ。孔子ハ尊ブベキ人ナリト
云ヘシトゾ。

櫻所子曰ク。此事酷々石勒ガ漢高六國ノ後ヲ立ントセシ
ヲ聞キ。此法當固失トイヒ。張子房ノ諫メシヲ聞キ。幸有此
事ト云フニ似タリ。嗚呼未ダ學ハズト雖也。之ヲ學ビタリ
ト謂フズヤモ。弥左衛門在リ。諺ニ所謂論語ヲ讀テ論

語ヲ知ラサレ徒。一商估ニ愧ル無キヲ欲スト雖也。得ベカ
ラズ。

第廿二 應舉心ヲ專ラニシテ繪事ニ刻苦セシ事

天明中。京都ニ應舉字ハ仲選ト云者アリ。性畫ヲ好ム。以為
ク肖眞寫生。物ゴトニ其精ヲ極メント欲スレバ。畢生カヲ
殫スト雖也。得ベカラズ。其性ハ近キ所ニ因テ。其妙ヲ窺フ
ニ若カズト。即チ雖及ビ狗子ヲ描ク。應舉初ノ雜ヲ描クヤ。
自ラ謂ラク。飲啄鳴號ノ狀。振翮修羽ノ態。既ニ其肖似ヲ得
タリ。但風神氣骨。天氣活潑ノ妙。猶ホ未ダ其精ヲ盡サズト。
乃チ日ニ滋園祠ニ至リ。雜ノ群ヲ為ス者ヲ視。竊立シテ動
カズ。人以テ痴呆ト為ス。而シテ顧ミザルナリ。此ノ如クス
ル者年アリ。一日恍然トシテ悟ルアリ。自ラ顧ルニ滿腔皆

雞ナリ。因テ試ミ、掩障ニ就テ之ヲ寫ス。神來生動ス。真ト
辨スル無シ。之ヲ祇園祠ニ獻ズ。人皆其巧手ナルヲ驚歎シ
ナリ。應舉猶由彼畫雞ヲ視テ、如何ナル批評ヲ為ス者アラ
ト。門生ヲシテ日ニ祇園祠ニ至リ、某評スル者アルヤ否
ヤヲ窺ハシム。觀ル人唯其妙技ヲ感スルノミ。一日賣雞翁
アリ、掩障ヲ望ムテ佇立スルヲ以時、獨語シテ曰ク、雞ノ傍
ニ草ヲ描カザリシハ最モ可ナリト。其去ルニ及ヒ、門生尾
シテ往ク。東洞院ニ至リテ、一門道ニ入ル。門生歸テ此事ヲ
語ル。應舉酒肴ヲ携ヘ翁ノ家ヲ訪ヒ、懇口ニ教誨ヲ乞フ。
翁ガ曰ク、吾畫ヲ知ル者ニ非ズト雖也。嘗テ雞ヲ畜養セシ
ニ、羽色ノ四時ニ變ズルヲ記憶セリ。足下ノ描キタルハ、冬
ノ羽色ニシテ、殊ニ精妙ナリシカバ、其傍ニ草ヲ描カレザ

リシノ、欺賞シテ、幣ヘテ獨語セシノミト。

應舉或時卧猪ヲ寫シント、欲シ、斯事ヲハ瀬ノ賣柴女ニ語
ル。女曰ク、我々村落ニ故テハ數猪ヲ見ルヲ得ト。一日女來
テ告ク、吾屋背ナル竹林ニ一猪ノ來リ卧スアリト。應舉直
トニ之ト伴テ往キ見ルニ、大ナル猪ノ眠レルアリ。故テ熟
視シテ之ヲ寫ス。後ト鞍馬ヨリ來テ炭ヲ賣ル翁アリ。此畫
ヲ豚ス。曰ク、是ハ病猪ニシテ卧猪ニ非ズ。何トナレバ猪ハ
眠ルト雖也、其背上短毛疎整スル者ナリ。此畫ハ定メテ病
トシ、猪ノ卧シタルヲ視テ寫シタルナラント。應舉此日前
ハ瀬ヨリ來ル婦ニ問フニ、彼猪ハ二三日ヲ經テ其處ニ
死セリト云フ。之ニ由テ應舉更ニ真ノ卧猪ヲ視テ、之ヲ寫
シ、世ハ嗚矣ヲ得ナリ。當時應舉ガ名聲翹然トシテ一時ニ

甲ケルヤ、斷續、零指人争ヒ購フニ重賞ヲ以テセリト云。
博所子ヨク。應舉ガ心ヲ專ラニシ。思ヲ致ス。此片如クニシ
テ。務メテ人ノ言ヲ聞キ。以テ益ヲ得ルヲ欲ス。宜ナリ哉。技
其妙ヲ極メ。名モ亦隨テ著ハレタルヲ。夫レ世上百般ノ學
藝技術。未ダ嘗テ師友切劘ノ功ニ藉テ。其美ヲ成サズン
アラザルナリ。今夫レ大都通邑人文ノ淵藪ニシテ。一技一
藝アル者。各々幟ヲ一方ニ樹テ。良師益友其人ニ乏シカラ
ズ。或ハ同僚タリ。或ハ朋友タリ。臂ヲ交ヘ膝ヲ接スルモ。就
テ其學ヲ所ヲ正スヲ知ラズ。語偶其文章議論ノ疵瑕ニ及
ベバ。輒ナ嘖然トシテ怒リ面ニ顯ハレ。人ノ指摘スルヲ嘆
ル。故ニ人ノ揄揚ヲ悦ビ。傲然トシテ自ラ夸テ曰ク。我學藝
天下ニ敵無シト。諸レヨ已ニ反求スレバ。果シテ益スルト

コロアルカ。將々擲スル所ナルナリ。嗚呼。俗日ニ澆漓ニシ
テ。學術技藝ノ進歩顯著ナルモノ鮮シ。應舉ノ事以テ流俗
ニ鍼砭ス可シ。豈ニ唯繪事ノミナラムヤ。世ノ文章議論ニ
長シ。學術技藝ニ老タルヲ以テ。稱シテ名家鉅匠ト為スモ
人。以テ識ムルヲ知ル可シ。豈ニ唯後進者ヲシテ。驕心ヲ生
ゼシメザルノ資ト為スベキノミナランヤ。

第廿三 森祖仙三年山ニ在テ其技ヲ切磋セシ事

森祖仙ハ。大坂ニ在テ猿ヲ畫クニ名アリ。初メ長崎ニ在リ
シ時。獵者ニ托シテ一ノ猿ヲ得タリ。因テ之ヲ庭樹ニ繫キ。
其傍ニ在テ猿ノ狀貌ヲ熟視シ之ヲ寫ス。鍛鍊スルヲ年ハ
リ。稍其真ニ逼ルヲ覺フ。遂ニ之ヲ繩素ニ淨寫シテ。清容其
ニ跡シ。其批評ヲ乞フ。客曰ク。惜クハ此レ人家畜養ノ形ヲ

ニシテ天然ノ趣ニ非ズト。祖仙之ヨリ、更ニ奮勵シ、深山ノ
中ニ棲遯シ、木石ト居リ、猿鶴上群ヲ成ス。三年、遂ニ其真
ニ逼ル。其技ヲ得タリトイフ。

櫻所子曰ク、夫レ畫ハ一小時ナリ、然レ凡其業ニ從事スル
者、技ノ精妙ナルヲ欲スレバ、カヲ用ユル。此ノ如シ之ヲ
以テ遂ニ其妙ニ至ル。況ヤ技ノ畫ヨリ大ナル者ニ於テマ
ヤ。

穿世四 熊代彦之進、虎園ノ前ニ在テ、虎ヲ畫キシ事
彦之進、名ハ斐、繡江ト號ス。世人通稱ヲ言ハズ、熊斐ヲ以テ
知ラル。肥前長崎ノ人ナリ。幕府ノ譯官タリ。人トナリ、膽氣
アリ。清人沈南蘋ニ從テ、畫ヲ學ビ、畫名一世ニ高シ。或時台
命ヲ奉ジテ、虎ヲ畫ク。恰々好シ、蕃船虎ヲ載ヒ來リシニ際

ス。斐紙ト筆硯トヲ携ヘ、虎園ニ近キ、肖貌寫生、其精ヲ極メ
ハトセシニ、虎蹲踞シテ、頭ヲ舉ゲズ。斐其動作ハ態ヲ見ル
ニ由ナキヲ以テ、傍ニ在ル竹頭ヲ執テ、虎ヲ毆ツ。虎大ニ怒
リ、忽チ頭ヲ擡ゲテ、斐ヲ嚇ス。龍目人ヲ射テ爛々タリ。傍人
皆驚愕シテ、奔リ避ク。斐獨リ自若トシテ、虎ノ狀貌ヲ熟視
シテ之ヲ寫セリ。始メ驚愕奔避セシ者、其膽勇ニ服セリト
イフ。

櫻所子曰ク、獸虎ヨリ、猛ナル無シ。瞻臣巴提使ガ虎ヲ斬ル
ガ如キハ、勇武ヲ以テ名ヲ得タル人。且ク然ルベシ、彼如藤
嘉明ガ、虎ヲ牽テ前ヲ過グル者アリ。傍人喧噪シテ、走り避
ク。嘉明ノミハ柱ニ倚テ坐睡シテ、知ラサル者ノ如ク。少時
アツテ目ヲ開キテ、何ゾ太ダ喧キ。虎ヲ牽テ過グル者アリ

シヤト云ヒシガ如キ。豊公ノ麾下ニ指ヲ屈スルノ猛將ナ
ル。又宜ク此ノ如クナルベシ。斐ハ一介ノ譯官ニシテ、畫
ニ巧ミナル者ノミ。然カモ能ク虎園ノ前ニ在テ筆ヲ揮ヒ
之ヲ毆打シテ、震怒ノ態ヲ熟視シテ動カズ。我ハ其膽勇
驚カズシテ、其畫ニ篤志ナルヲ嘆スルナリ。斐ガ畫ノ爲メ
ニ勉ムルノ至レル此ノ如シ。其寫出セル所ノ虎亦必ズ狗
ニ類セズ。眼中自ラ百歩ノ威ヲ具ヘシナテム。斐ガ丹青ヲ
以テ、名ヲ一世ニ擅ニセシモ亦宜ナリ。一技ニ長ズル者其
カヲ用ユル。虎威ヲモ避ケズ。今ノ書ヲ讀ミ道ヲ知ラント
スル者ニシテ、猶ホ風雨寒暑ヲ懼ル。豈一畫師ニ羞ルナキ
ヲ得ンヤ。

第廿五 池無名發憤苦勵セシ事

池無名、字ハ貸成、九霞山樵ト號ス。京都ノ人ナリ。世ニ大雅
堂ト稱スル是ナリ。書ヲ善クシ畫ヲ巧ミニス。書ハ晉唐ノ
古帖ニ刻意シ、結體飄逸。自ラ一家ヲ成ス。畫法ハ則テ梅道
人倪雲林ノ間ニ出入シ、專ラ氣韻ヲ以テ主ト爲ス。山水尤
モ清絶ナリ。世人争テ之ヲ購フ。零雜斷楮ト雖、尺寶重セザ
ルハ無シ。是ヨリ先キ、狩野氏土佐氏世畫苑ノ冠冕ト爲ル
其ノ衣鉢皆宋元諸名家ニ出ツ。而シテ授受寢、其真ヲ失ク。
卒ニ變ジテ寒俗トナル。有志ノ士其弊ヲ矯メテ之ヲ復セ
ント欲シテ、カ以テ之ヲ振フニ足ラズ。獨リ、貸成才最モ高
ク、志最モ篤シ。勤メテ必ズ法ヲ震且ニ取ル。而シテ時人未
ダ之ヲ信ゼズ。嘗テ畫扇ヲ齎ラシ、尾濃諸列ニ遊ブ。一握モ
售ハズ。雨ハデ、歸リ、瀬田ノ橋ニ抵リ、悉ク之ヲ水中ニ投ジ

蓋發憤苦勵シテ遂ニ古人ノ堂奥ヲ窺フ各聲隆々然トシテ海内ニ震フ而シテ畫ヲ言フ者宋元諸家ヲ以テ準據ト爲ナドル無キニ至ル貸成性山水ヲ好ム又濟勝ヲ異ニ雷ム千里孤往月ヲ經テ返ルヲ忘ル層巒複嶺飛屐上下ス其高峻ヲ極メザレバ止マズ最モ富士山ヲ愛シ屢之ニ登ル毎ニ其路ヲ異ニス榛莽ヲ披キ狐兔ノ蹊ヲ攀チ人迹ノ未ダ至ラザル所ヲ究ム先後作ル所富士山ノ圖凡ソ一百種横側正偏其妙ヲ備極シ天下ノ絶筆ト爲ス櫻所子曰ク大雅堂嘗テ画扇ヲ齎ラシテ尾濃ニ遊ブヤ一握モ售レズ其能ク古人ノ堂奥ヲ窺フニ至テハ則チ零雜斷楮ト雖氏人爭テ之ヲ購フノミナラス海内ノ畫風ヲ一變シ狩野氏上佐氏ノ二流ヲ壓倒スルニ至ル其天下ノ絶

筆ト稱セララルヲ以テ今ニ至ルマデ其畫幅ヲ傳フル者ハ十輩珍藏ス積成何ヲ以テ其妙ヲ極ムルコト此ノ如クナルヲ致セシヤ曰ク其志ノ最モ出クシテ發願苦勵セシニ由ルノミ其人タル襟度蕭散塵垢以テ其懷ヲ潤セザルヲモツテ奇致全涌スト云フカ如キハ抑モ末ナリ

穿廿六 皆川淇園讀書ニ勤勉セシ事

淇園又弟齋ト號ス京都ノ人ナリ年四五歳ニシテ早ク文字ヲ識レリ其父試ニ杜少陵カ秋興八首ノ詩ヲ書シ與ヘシニ曰アラズシテ記憶セリ是ヨリ讀書ヲ課トス督促ヲ煩サス其父恆ネニ世儒記誦ノ學ヲ賤視シ嘗テ明經弘道ニ志シアリト雖長年已ニ老タレバ其事業ヲ成就スルコト難シトテ淇園及ニ其弟成章ニ命ジテ其志ヲ繼ガシ

、經史百家ノ書、聞見ヲ賚ケ、學識ヲ長スベキ者ハ、需ム
ルニ隨テ之ヲ與ヘ、當時乃宿儒博學ノ人々、昔ネク交
ハ、其結ヒテ來往セシメタリ、成章ハ、人ノ辨論スル所ヲ聞
ハ、輒チ曉通シ、言ハ畢ルヲ待タズ、洪園ハ、蒙昧ニシテ通セ
ズ、者ハ如ク、詳悉ニ疑ヒテ質リ、以テ止マズ、人ヨク、一
子ハ優劣ヲ辨スルヲ無シ、然レトモ汎ク古今ノ載籍ニ涉
リ見ルコト罕レナル者ニ至テハ、必マ搜索ヲ窮ムテ窺ハ
サル所無キハ、成章達ク、洪園ニ及バズ、ト云ク、洪園或時其作
ル所ハ、文ヲ一若儒ニ示シテ、正ラ乞フ、輒チ數字ヲ改メタ
ルハ、其字義ヲ問ハ、改メタル文字、稍優ルヲ覺ユト答
ヘテ、其優ル所以ヲ説カズ、洪園竊カニ謂ク、文ヲ緩ルニ字
義ヲ知ラズ、シテ豈可ナラシヤ、况ヤ、經義ノ解スルヲヤト

又ヨリ、洪園字學ニ傾キ、沈潜反覆、字典ノ訓詁出者多ク
ハ、假借ニシテ實ヲ得ルコト難シ、古今ノ字ヲ用ルハ、例
ヲ類集シテ、其理ヲ考覈シテ、通曉スル者、知カスル、象形
由リ、聲音ニ求メ、始メテ言外人、以テ得之、ト云ク、
予、文ヲ撰ビ、旁引會通、以テ審カテ、孝博忠信、仁義道徳ヲ、
以テ名、疇ニ六篇ヲ作ル、且ク、易詩書儀禮載記春秋論孟學庸
ノ譯解、凡ノ數百萬言、皆世ニ行ハル、其易ニ於テカヲ用
ルニ、最モ深シ、義ヲ思フテ得ル、并レバ、終夜寐ネズ、晨起執
筆對シテ、明ヲ候キ、食スルヲ方テ、手書ヲ傳ラニ置キ、且ツ
食シ且ノ讀ミ、晝ハ務レヨ、庸ヘズ、及門人ノ來テ教ヘヲ乞
フ、予リ、若クハ客來テ談話スルヲ、此モ其對スルマ、ト云
ク、予、座ヲ移スコト無シ、門人退キ、客去レバ、書ヲ讀ムコト

復々初々如之。故三叔碑々其室內者掃夕自ア其長洪園ノ座ニ交々能ハズ一日洪園ハ出々其窺也。机邊ノ座ヲ掃ハスト其室スル所ノ見ルニ厚席掛帳シテ暗業セリ。猶且ツ其席ヲ微シテ腐朽床ニ及テリ。其如書ヲ讀ムハ尋常ナラザルヲ知ル可シ。文化ニ及テ其門人ハ遇スル威ヤ以テ學堂ヲ建テテ弘道館ト名付其門人ハ遇スル威ヤ以テ嚴ナラズ。愛シテ押シシメテ其門人ハ遇スル威ヤ以テ及ビ商賈農家ノ子弟ハ雖ハ推接請謁一モ殊ナルナリ。以、雖貴ニ屈セズ。寒素ヲ職シ人々其門ニ入テ業ヲ問テ先後三千餘人。及テ洪園其詩賦文章ノ如キハ意到筆隨セ言ハソト欲スル所手ヲ下セテ則チ發然トシテ成章ス。マカカヲ用ユルコト無シ。所謂讀書一萬卷筆下シテ神

アルモハナルベシ。文化ト外ハ夏病トテ食セズト雖氏且々書ヲ講シ門人ヲ率エルト平生ハ如シ。其五月十六日ヲ以テ歿ス。享年七十四ナリシト云ス。人主其志也。洪園曰ク成章ハ才思活潑ニシテ人ノ論辯スル所ヲ聞テ言ノ畢ルヲ待タスシテ能ク曉通ス。洪園ハ沈着ニシテ又覆疑義ヲ質サレバ止マズ。而シテニ子ノ學識ヲ比較スルニ洪園ハ復カニ成章ノ右ニ在リ。是其勤勉ノ力。成章ノ能ク及テ所ニ非ルヲ以テナリ。才思人ニ過グルアリト雖氏勉力足ラザル氏ハ翻テ勉才ニシテ勉強尋常ニ超ユル者ニ及ハサル。古來其例多シ。少年才子。深ク自ラ識メズシバアル可カラザルナリ。

第二十七 賴子成勉強刻苦シテ其志ヲ達セシ事

子成名ハ裏通稱ハ久太郎其父春水藝州竹原人初大
阪ニ寓シ徒ニ授ク飯岡氏ヲ娶リ安永九年子成ヲ江戸堀
坊ニ生ム子成甫六歳怒ル其母ニ問テ曰ク天ハ何如ナ
ル物ト母曰ク旋轉止マズ彼ガ如キハ天子成英ニ下
ル天ヲ仰ギ嘆シテ曰ク不可思議ナル哉ト啼泣半時許リ
八九歳ヨリ喜ムテ古來ノ軍記ヲ讀ミ寢食ヲ忘ル至
ル既ニ句讀ヲ受クルニ及テ晝夜懈ラス早ク雄邁俊偉ノ
志氣ヲ抱ク寛政五年子成年十三ニシテ一詩ヲ賦シテ曰
ク
十有三春秋逝者已如水天地無始終人生有生死安得類
古人十載列青史
亦其志ノ存スル所ヲ見ルニ足レリ嘗テ眼ヲ患フ春水固

ク書ヲ讀ムヲ禁ス陰カニ之ヲ讀ムテ止マズ年十四五家
庭ニ學ビ小學近思錄皆已ニ誦習ス一日書ヲ曝ス東坡ノ
史論ヲ讀ミ嘆レテ曰ク天地間此ノ如ク喜ブズギノ文ヲ
ハカト遠ニカラ文章ニ肆ニス最モ史學ニ精シ即チ史ヲ
著シ文ニ托シ以テ後世ニ垂ントス而シテ其書ヲ著スル
マ身大都ニ居天下ノ英俊ト交リ書ヲ讀ム多カラザレバ
則チ能ハス之ヲ以テ早ク遠遊ヲ思フ父母尚ホ之ヲ膝下
ニ羈セント欲スルヲ以テ果サズ年十八叔父杏坪ニ從ヒ
東遊シ尾藤ニ洲ノ塾ニ在ル一年才學日ニ進ム即チ藩ヲ
脱シテ京ニ赴ク是ヲ以テ罪ヲ越驅ニ得仕藉ヲ免ス文化
七年菅茶山其塾生ヲ督セシコトヲ請フ乃チ備後ニ遊テ
翌年去テ京都ニ遊ヒ遊ニ止ル年三十二子成常ニ昇平日

久ク士氣振ハザルヲ慨ス故ニ氣節ヲ以テ自ラ持シ、亦以テ人ヲ導ク未ダ帝ヲ已レヨ臣シ人ニ隨テ浮沈容ヲ求メス其故國ヲ去ル誓テ曰ク已ニ父母ノ國ニ仕フル能ハズ後々官服ヲ著ケテ責人ヲ見ズト而シテ就ニ入ルノ後子藝列侯ノ往來伏見ヲ過グルヲ聞ク必ス袴ヲ着ケ南ニ對テ望ミ拜ス諸藩之ヲ聘スレド皆因辭シテ應セズ日野大納言實發文辭ヲ好ミ都下ノ諸儒ヲ招キ文字欲ヲ爲ス其名ヲ聞キ之ヲ請スレド往カズ其請數回ニ至ル乃チ陳ス野人禮節ニ習ハズ若シ野服出入シ及ビ賜子ノ際臣禮ヲ盡スル者ナクハ則チ敢テ命ヲ奉セシト大納言之ヲ許ス乃チ往ク翌日金ヲ餽リ以テ謝ラ爲ス子成之ヲ見テ曰ク豈禮幣ニシテ人ノ名ヲ小書依書シ自ラ巳ガ名ヲ大

署スル者アラシヤト門生ヲシテ之ヲ返却セシム大納言從テ之ヲ謝レ益其厚セザルヲ敬ス嗣後自ラ其廬ヲ訪フニ至ル一日子成ヲ召シ宴ヲ賜ス醉後戲レニ畫ヲ作クル一大藩侯見テ之ヲ喜ビ人ニ介シ朝鮮布二幅ヲ寄セテ畫ヲ請フ子成憮然トシテ曰ク我ヲ以テ畫工ト爲スカト乃チニ絶句ヲ作り其布ニ大書シテ之ヲ返ス其一ニ曰ク曾謝橫經弄翰儒寧能餘技備觀娛胸中畫本猶堪陳彷彿
滿風七月圖
家藏書無シ四子五經東坡集唐宋八大家文數品本朝ノ史ハ唯烈祖成績蕃翰譜ノミ而シテ古今ノ史籍制度兵法及世家譜野乘涉獵セザルハ無シ終ニ能ク外史政記ノ大著作ヲ成ス一生ヲリ外史ヲ請フ子成之ヲ領ヌ後土又來リ

促シテ曰ク一權貴ニ獻セシト欲ス上子成色ヲ正フシテ
曰ク我が史ハ權門類ヲ納ルハ具ニアラズト竟ニ與ヘ
ズ
子成名既ニ一時ニ重シ京ニ遊ブ者多ク來テ見ユルヲ求
ム一切謝絶シ已ムヲ得サルニ非レハ則チ見ズ平生讀書
ニ耽リ著述ヲ勤ム常ニ門生ニ謂テ曰ク我ヲ子ト謂フ
ハ未ダ我ヲ悉クサズル者ナリ我ヲ能ク刻苦スト謂フ者
ハ真ニ我ヲ知レリト夕べニハ則チ燈ヲ挑ゲテ書ヲ讀ミ
五更ニ至テ後チ寢ニ就ク朝夕ニハ則チ起キ自ラ衾襦ヲ
収メ戸牖ヲ掃セ以テ常ト爲ス寒暑ト無ク一ナリ其人ニ
接スル吟域ヲ設ケス直チニ斯瀛ヲ吐ク人皆モ其意ニ違
ヘバ對面詰責シテ必クモ假借セズ改ムレバ則チ止ム未

ダ嘗テ毫モ意ニ介セス門生ニ教ユル甚タ意ヲ用ニ書ヲ
講スルニ抗聲飾辯セズ恟々トシテ談話ノ如クシ倦ノバ
則チ煙ヲ吹キ茶ヲ喫シ必ズ藎典ヲ摘發シ妙旨ヲ剖析シ
人々ヲシテ了然タラシメテ後チ止ム天保元年胸膈ヲ患
フ久シクシテ愈ユ同三年六月忽チ咳嗽ヲ發シ血ヲ咯ス
醫曰ク是レ積年精神ヲ勞スルノ致ス所所謂肺血疾ニメ
治スベカラザルナリ先生ハ藁傑ニシテ死ニ怖レズ敢テ
實ヲ以テ告グト子成笑テ曰ク死生命アリ然レモ我レ老
母アリ且ツ志業未ダ成ラズ假令一ノ生理無キモ宜ク醫
療ヲ加フベシ慎ムテ藥ヲ服シ傍ラ死計ヲ爲サシノミト
時方ニ日本政記ヲ著ス乃チ日夜勉強レテ稿ニ構ス曰ク
我レ必ズ之ヲ成シテ地ニ人ヲシトス下秋ニ及ヒ疾益劇

シ。然レ臣客至レバ談笑自若タリ。偶、猪飼敬所來リ訪ヒ、談
南北朝ノ正統ノ事ニ及ブ。議大ニ合ハズ。子成曰ク、苟モ北
朝ヲ以テ正統ト爲ス、豈ニ新田楠諸公ヲ以テ亂臣賊子ト
爲シヤト。目張リ眉軒ガル。其慷慨激烈。病ト雖臣衰ヘズ。
遂ニ更ニ正統論ヲ著シ。之ヲ政記中初論ノ後チニ置ク。子
成ノ議論用ニ適スルヲ以テ主ト爲ス。書名亦諱シ、ト雖
凡緒餘ノミ其常ニ心ヲ用ニルハ經濟ノ學ナリ故ニ弱冠
ヨリ以來、蘇軾ガ策論ニ擬シ新策十餘篇ニ作り。晚年ニ及
ビ頗ル之ヲ刪潤ス。即チ通議ナリ。死ニ先ダツ、三日、忽チ、曰
ク、猶ホ言ハザル可カラザル者、在ル下リト。即日、之ヲ草
ス。内廷篇是ナリ。外史ハ凡ソ二十年ヲ經テ成ル。而シテ後
チ猶ホ之ヲ家ニ秘ス。白河樂翁少將之ヲ聞キ、禮ヲ與フシ、

以テ之ヲ請フ。是ヨリ遂ニ世ニ行ハル。政記最モ晚年ノ作
ニシテ、記事多ク稿中ニ成ル。而シテ終ニ全ク稿ヲ脱スル
能ハザリシナリ。子成病既ニ革カナリ。曰ク、我カ死方ニ垂
レリト。然レトモ猶ホ眼鏡ヲ著ケテ。政記ヲ手ニシ。刪潤シ
テ止マス。忽チ左右ヲ顧ミテ曰ク、且ク、喧キナカレ。我將サ
ニ假寐セント。スト乃チ筆ヲ閣シ。眼鏡ヲ脱セズ。シテ瞑ス。
就テコレヲ撫スレバ則チ逝ク。年五十三。天保三年九月ヲ
リ。

櫻所子曰ク、子成ノ著スル所。外史政記ノ如キ。全国ニ傳播
シ。初學ノ國史ヲ讀マントスル者、闕クベカラザルノ書
トスルニ至ル。而シテ、楠川氏、李世、勤王ノ士輩出スト雖
凡國內一般ニ貴賤ト無ク、王室ヲ尊ビ、幕府ヲ賤ムヲ知ル

ニ至リシ者、子成ガ史ヲ修メ、其言辭ノ慷慨激切ナル大ニ
 人心ヲ感動セシ者、與ツテカアリト謂フモ大過ナカラス、
 彼大日本史ノ如キハ、卷帙浩繁其載スル所亦詳明ナリト
 雖氏、水戸藩侯ノ學士ヲ招集シテ編纂スル所、即十官撰ノ
 書ナリ、外史政記ノ如キ、子成布衣ノ士ニシテ、善ク之ヲ成
 ス、殊ニ其家藏書ニ乏シク、僅カニ烈祖成績藩翰譜ノ二書
 ノ外、他ハ數部ノ漢籍ニ過ギズト云テ以テスレバ、其引用
 ハ書ヲ借覽シ、或ハ抄録スル等、苦辛思フベシ、而シテ其政
 記ノ如キハ、病犬ニ漸ムニ及ンテ、猶ホ手ヲ釋カズ、此ヲ刪
 潤シ眼鏡ヲ著ケテ撰スルニ及ヘルモノ、實ニ勉メタリト
 謂ノベシ、子成、成年猶ホ幼フシテ、既ニ古人ニ類シテ、千載ノ
 後、十ニ至ルマテ、名ヲ竹帛ニ垂ル、ニ志アリ、稍長ズルニ

及ビ、時ノ不可ナルヲ知り、敢テ仕ヲ求メス、權貴ニ阿ムレ
 ズ、史ヲ著シ以テ後世ニ垂ントスルヤ、三式屬績ノ間、猶ホ手ヲ
 釋カズト云フニ至ル、宜ナル哉、其成業ノ卓然トシテ能ク
 其言ヲ踐ミ、其志ヲ達シ、之ニ效テ垂髫兒ト雖、山陽頼襄
 アルヲ知テザル者無キヲ致セルヲ、其此ノ如ク志ヲ遂ク
 得タル所以ハ何ゾヤ、其自ラ我ヲ才子ト謂フハ、未ダ我ヲ
 悉クサバ、ル者ナリ、我ヲ能ク刻苦スト謂フハ、真我ヲ知
 ル者ナリト謂フヲ以テ見レバ、蓋シ子成モ亦刻苦勉強ヲ
 以テ之ヲ成就セシモノニ外ナラザルヘシ、若シ之ヲ天稟
 ノ史才筆力アリテ然ル者ト爲ストキハ、子成豈ニ首肯セ
 シヤ、今ヤ日漸進歩ノ隆運ニ際シ、興スベキノ事業、學ガベ
 キ、藝術、數フルニ勝ユベカラズ、誰カ能ク雄邁俊偉ノ志

氣ヲ抱キ、古人ニ類シテ千載青史ニ列スルコトヲ期スル者
ガヤ、誰カ能ク刻苦勉勵、日夜怠ラザル。子成其人ニ減ゼザ
ランコトヲ誓フ者ソヤ。

第二十八 古川某地理ヲ究メンカ爲メニ海内ヲ歴

遊セシ事

古川某ハ備中ノ人ナリ。幼ニシテ大志アリ。地理學ヲ喜ブ。
學業クハ所無ク、少小ヨリ海内ニ浪遊シ、奥羽ニ於リ、鰯浦
大渡リ、蝦夷ヲ窺ヒ、筑紫薩隅ヲ窺ヒ、鬼界島ニ至ル。其間、鳥
道ヲ隸テ、洪波大濤ヲ漲リ、饑寒困頓、舟始ド覆ヘリ、溺没セ
タトス。雖、氏自若ナリ。山谷ノ形態隆然タリ、窪然タリ、及
ビ眺覽スル所、樹棘ノ如ク、波瀾熾ルガ如キノ狀ヲ寫ス。畫
矣。工代ナル者ノ如シ、尤喜ム。近古戰爭ノ跡ヲ尋ネ、其攻

守勝敗ノ由ル所ヲ觀、鈎股法ヲ以テ遠近高低ヲ揣カリ、圖
說ヲ著ハシ。鑿々トシテ據アリ。嘗テ世ノ兵ヲ以テ家ニ名
アル者ヲ罵テ曰ク、此輩ハ芋ヲ煮テ熟否ヲ辨セザル者ナ
リ。烏ンゾ實用ニ施スベケンヤト。寛政中、關老越中守白川
侯路ニ當ル。意ヲ海防ニ注ギ、關東諸港津ヲ巡視ス。某ノ名
ヲ聞キ、遠ク召致シ、詢フ所アラント欲ス。即チ往キ、謁シ、問
ニ隨テ、指畫ス。應對流ル、カ如シ。侯大ニ之ヲ奇トス。尋テ
命ヲ受ケ、武藏五郡ノ圖譜ヲ釐正ス。皆ニ稱フ。遂ニ翁ヲ祿
セント欲ス。人ニ意ヲ以テ某ヲ諭サシム。某晒テ曰ク、吾老
タリ、折腰ノ事ヲ習ハスト。直チニ歸テ室ヲ某郷岡田村ニ
築キ、門ヲ杜ガテ書ヲ著シ、咏歌自ラ娛ム。嘗テ人ニ謂テ曰
ク、大大夫無事ノ時ニ生レ、已ニ彼ノ富岳白山ヲ盆玩シ、大

湖、茅、澤、ヲ、汎、視、ス、ル、者、ト、相、周、旋、ス、ル、能、ハ、ス、今、世、ノ、所、謂、薦、
紳、死、生、ハ、備、稱、ノ、用、ニ、供、ス、ル、ニ、足、ラ、ズ、其、々、ハ、差、可、ナ、ル、ノ、
ト、
櫻、所、子、曰、ク、親、山、陽、某、ノ、事、ヲ、記、シ、テ、曰、ク、其、海、内、輿、地、及、ビ、
四、隣、畧、圖、ヲ、觀、ル、ニ、世、ノ、地、圖、ト、大、ニ、異、ナ、リ、州、郡、ノ、界、ヲ、畫、
セ、ス、特、ニ、山、川、脈、理、ヲ、示、シ、畧、列、名、ヲ、傍、ニ、署、ス、ル、ハ、余、此、
ニ、因、テ、海、宇、ノ、大、勢、ヲ、識、ル、ヲ、得、已、ニ、シ、テ、四、方、ニ、遊、ビ、以、テ、
之、ヲ、驗、ス、ル、ア、リ、史、ヲ、作、リ、且、ツ、事、ヲ、論、ス、ル、ニ、及、ビ、依、據、ス、
ル、所、多、シ、皆、ナ、翁、ヲ、賜、ナ、リ、ト、亦、以、テ、某、ノ、兼、ケ、ル、所、無、ク、シ、
テ、而、シ、テ、大、ニ、得、心、所、ア、ル、ヲ、見、ル、可、シ、思、フ、ニ、某、ハ、太、平、無、
事、ハ、日、ニ、生、レ、奮、然、ト、シ、テ、地、理、ノ、學、ヲ、實、際、ニ、就、テ、研、究、セ、
シ、ト、欲、シ、跋、渡、ハ、勞、ヲ、辭、セ、ス、脚、跡、蜻、蛭、全、洲、ニ、遍、ネ、シ、當、時、

舟楫ノ便ナラザル道路ノ險惡ナル其困苦想フ可キナリ。
今世ノ人士學藝技術ニ刻苦奮勵スル山中某ノ如クナラ
ンニハ何事カ成ラザラン而シテ其功烈亦昔時ノ如ク湮
沒セズシテ永ク美名ヲ日本文明史ニ輝カスアラント必
セリ今日ニシテ學術技藝ニ奮勵スル所無クンハ將タ何
ノ日ヲ待タンヤ

第二十九

事

森宇左衛門書ヲ手寫シ數十卷ニ至リシ

事

森宇左衛門字ハ白高江戶ノ人也世傳母ノ城主内藤侯ニ

事ヘテ宰臣ト爲ル白高人ト爲リ慷慨ニシテ勉強ハ力人

ニ過絶ス學ヲ好ミ凡ソ治邦安民ヨリ兵法火術等海書ニ

至リマテ佳著ヲ得レバ輒予之ヲ手寫ス膏ヲ焚キ晷ニ繼

至リマテ佳著ヲ得レバ輒予之ヲ手寫ス膏ヲ焚キ晷ニ繼

右ニ置キ、反覆披展シ、朱黃爛然タリ、必ス其要領ヲ得テ止ム。白高官事執掌ト雖氏、而カモ閑ヲ愉ミ、達人名士ト交リ、臨谷宮陰川、西士龍安、井仲平、芳野叔果等ト、詩酒徵逐ス。時ニ天下晏然トシテ、四境無事ナリ、然レ氏白高、清國ニ鴉片ノ亂アルヲ聞キ、竊カニ杞憂ヲ抱キ、友ト相遇フ、輒チ兵備ヲ論究ス。最モ心ヲ海防ニ留ム、日夜勞畫スル所アリ、以テ事ニ施スヲ思フ。中風ニ罹リ、文久三年、歲五十九ニシテ歿ス。

櫻所予曰ク、白高一藩ノ宰臣トシテ、官事執掌ノ間、能ク一時ノ名士ト交ルスヲ、尋常俗吏ト同視ス可カラズ。其清ニ鴉片ノ亂アルヲ聞キ、海防ノ事ヲ畫ス、亦憂國ノ士ト謂フ

可也。況バ書數冊、筐ヲ手寫シ、座右ニ續ムテ、反覆披展スルニ至ル。篤志ト謂フ可キナリ。

第三十 觀世次郎太夫、儉父ヲ師トセシ事

猿樂ニ觀世部ナル者アリ、足利氏ノ時ニ著ハレ、累世業ヲ襲ヒ、徳川氏ノ時ニ至ル。次郎太夫ト云者、三至テ、尤モ著ナル、ト云フ。猿樂ニ曲名木賊ト稱スル者アリ、最モ工ニナリ難シ。世泰スルニ至ナル者ナクシテ、次郎太夫獨リ此曲ヲ以テ著ハル。毎ニ之ヲ奏ス、諸伶部號シテ、善伎者ト稱シ、皆嘆稱シテ、措カス。次郎太夫モ亦自ラ謂ラク、天下ノ此曲ニ效ナル者、我ニ若クナシト。或時觀世部大ニ場ヲ櫻田ニ開キ、以テ伎ヲ演ス。奏木賊ノ曲ニ及ブ、都下傳聞シテ、侯伯士大夫ヨリ、賈豎販婦ニ至ルマデ、聚觀セサルハナシ。既ニ

シテ次郎太夫、錦袍繡袴、鎌ヲ手ニシテ出ツ。祈旋舞踏、悉ク其節ニ中タル、或喝采シテ已マズ、呼聲沸クガ如シ。曲闌ル。次郎太夫、頷テ、其徒ニ謂テ曰ク、觀ル者皆服ス、而シテ獨リ、隅ニ笑フ者アリ、汝等物色シ來レト、乃チ諸レヲ門ニ要シテ得タリ、其人叩頭シ罪ヲ謝ス。次郎太夫曰ク、何ゾ罪ヲ謝スルヲ須キシヤト、因テ其業ヲ問ヘバ、則チ云フ陸奥ノ人ニメ、木賊ヲ刈テ生ト爲ス、其笑フ所以ヲ問ヘバ、則云フ木賊叢生スル、運鎌尤モ難シ、一前一却、便チ能ク之ヲ剪ル、今君カ爲ス所ヲ觀ル、則チ却剪スルノミ、吾故ニ其法ヲ失スルヲ笑ヒシナリト。次郎太夫大ニ感悟シ、即チ其儉父ヲ拜シ、師ト爲シ、講習日夜ヲ累ネ、盡ク其法ヲ得タリ。是ニ於テ再ヒ木賊ノ曲ヲ奏ス、其巧妙更ニ前ニ倍增ス、而シテ木

賊、次郎太夫ノ綽號、天下ニ著ハル。次郎太夫終ニ千金ヲ以テ、儉父ニ報スト云フ。
櫻所予曰ク、聞ク楊廷秀ハ、博學宏文ナルモ、嘗テ下吏ノ言ニ從ヒ、文中ノ一字ヲ改ム、吏ヲ稱シテ一字ノ師ト爲スト。傳ヘテ以テ美譚ト爲ス、然リト雖、廷秀ハ有識ノ士ナレバ、汎ク益ヲ求メテ貴賤ヲ論セサリシモ、亦深ク恠ムニ足ラス。次郎太夫ノ如キ、一伶人ノミ、其意ヲ伎ヲ用ユルノ篤キ、嘗ニ諸伶人ノ若カサルノミナラス、儼然タル士君子ト雖、次郎太夫ニ愧ル無キ者、蓋シ鮮シ、何トナレバ世上却剪スルノミナル者アリテ、其隅ニ笑フ者一人ノミナラザルモ、延テ之ヲ問ヒ、問フテ之ヲ師トスル能ハザルノミナラス、憤然其笑フ者ヲ罵テ曰ク、彼ハ儉父ナリ、彼ハ暴書生

ナリト。翻テ已ヲ妬ミ已レヲ歎ル者ナリトシテ之ヲ賤斥ス。故ニ已レガ失錯誤謬アリト雖モ多クハ之ヲ悟ラス。偶之ヲ知ルモ改メス。隨テ之ガ辭ヲ作クル。吁。士君子ニシテ一伶人ノ平素黽勉意ヲ伎ニ用エルノ篤キニダモ若カスシテ可ナランヤ。學者須ク反省スル所アルベキナリ。

第三十一

寶生彌五郎指ヲ咋ムデ假面ニ血ヲリシ

寶生彌五郎ハ、散樂ヲ以テ幕府ニ仕テ、發ク善伎ヲ以テ名アリ、而シテ道成寺ノ曲、殊ニ其得意ト爲ス。時ニ某侯酷ダ散樂ヲ好ミ、嘗テ彌五郎ヲ召シテ其曲ヲ演セシム。彌五郎乃チ女装ヲ扮シ、舞曲ヲ奏シ、烏帽繡衣階ヲ踐ムテ場ニ上ル。既ニシテ謠ヲ謠ヒ畢テ鼓笛響キ急ナリ。舞踏上下直ク

ニ前ニテ鐘ニ道ツキ、唯テ懸鐘ニ入ル。鐘人ト與モニ墜ツ。凡ル此曲ヲ演スル者、例シテ豫メ鬼ノ假面ヲ鐘中ニ置キ、以テ後曲ハ換装ニ備ス。此日彌五郎之ヲ索ムルハ、換シ、諸伶輩其伎能ヲ妬ミ、潛カニ度シ以テ之ヲ窘ムルノ事。彌五郎之ヲ懸下ル切齒憤懣ス。既ニハ謂テ久事已ニ此ニ至ル其狼狽奔走シテ笑ヒテ衆人ニ取テテヨリハ非常ニ其ヲ作シ以テ人目ヲ驚カスニ孰若シト乃チ其指ヲ咋シ之ヲ前曲用エル所ノ假面ニ塗ル。鮮血淋漓トシテ鬼氣真ニ逼ル。取テ之ヲ蒙リ非装成テ鐘上ニ懸。彌五郎乃チ起舞。曲ヲ奏ス。然氣勃々毛髮悉ク張ル。加フルニ假面ハ奇異ナルヲ以テ不觀ル者驚歎シ以テ絶技ト爲ス。曲闌テ候其所由ヲ問ヒ始メテ其儼華ノ窘ムル所下ルヲ不知リ。激賞ス。

盈ツ。又擢テコレテ度支ヲ掌ドリ、財政ヲ革新、時ニ藩ノ紙幣溢出シ、價格大ニ減ス。琳卿其半ヲ火ス、乃チ原價ニ復セリ。又大ニ物産ヲ殖シ、轉ジテ江戸ニ鬻ギ、以テ經費ニ充ツ。是ニ於テ貯金歳入ニ倍シ、兵械ノ殘缺スル者、盡ク備具シ。士祿ノ節減スル者、皆舊ニ復ス。候又琳卿ヲシテ郡宰ヲ兼テ、民政ヲ革新シム。琳卿乃チ賄賂ヲ絶テ、奢靡ヲ禁シ、郷校ヲ設ケ、貯倉ヲ置キ、道路監キ、昔ハ之ヲ拓キ、川濶塞ガル者ハ之ヲ疏シ、巡吏ヲ嚴ニシ、郷兵ヲ編シ、以テ不虞ヲ戒ム。之ヲ行フ丁十年、民皆俗變ス。是ヨリ先キ藩侯其家臣ノ弊風ヲ革ム、カテ文武ニ專ラニシ、及ビ洋陣ヲ演セシメ、軍艦ヲ購フ皆琳卿ノ贊成スル所、衆論喧騰、風刺一身ニ華マル。琳卿シテザルモ人々如シ、而シテ侯益之ニ任ジテ、疑ハズ。

祿百石ヲ加賜シ、參政ニ任ス。親モ亦終ニ服ス。當時身平日久シク、列藩奢侈遊惰ニレテ文武ノ何事タルヲ知ラス。是ヲ以テ松山藩革政ノ名、殊ニ藉々タリ。四方ヨリ來テ風ヲ觀ル者、跡ヲ絶ズシテ、琳卿ニ就テ理財ヲ問フ者、最も多シ。文久元年、幕府使ヲ以テ寺社奉行ト爲ス。琳卿扈從シ、江戸ニ如ク會略血ヲ患ヒ、歸養ス。何クモ亡ク、侯閣老ト爲ル。琳卿ヲ召ス。琳卿疾ヲカノテ東行シ、顧問ニ備ハル。大將軍將ニ謁ス、賜ハ、侯遠ニ琳卿ヲ必テ老臣ニ推ズ。是時外國親主シ、大藩改扈シテ、幕政潰々タリ、積弊百出ス。琳卿侯ヲ輔ケ、大ニ整革スル所アレント欲ス。謁ヲ春岳明山諸侯ニ執リ、嶺井桂ノ諸士ニ接シ、百方周旋ス。然レモ否運ノ復々回ス可カラザルヲ見、遂ニ疾ニ移シテ致仕ス。侯其留ム可カラ

平ルヲ知リ、乃ヨリ賜ヒ慰勞シテ之ヲ許シ。猶ホ藩政ノ議ニ
與カセテ命ズ。維新ノ後、琳卿年老ニ世事ヲ厭フテ刑部山
中ニ退隱ス。而シテ六四方ヨリ來テ業ヲ問フ者、率チ數百人
明治十年六月、年七十三ニシテ歿ス。
琳卿ハ人タル。豪爽ニシテ智略アリ。議論多ク人ノ意表ニ
出ズ。而シテ恭遜以テ之ヲ行ヒ、忠誠以テ之ヲ貫ス。故ニ
人皆信服ス。少壯ニシテ酒ヲ嗜ミ、快飲劇談、往々曙ニ徹シ
テ、此心遠ニ此ヲ以テ疾ヲ致ス。一意攝養、杯ノ手ニセザル
者二十年。其性ニ克チ欲ヲ窒キ、實踐ニ篤キ、大抵此ニ類ス。
其博聞、浹洽ナル書ニ於テ讀マザル所無シ。讀ム必ス精到、
深詣、獨得ノ說多ク、又禪理ニ達カシ。其平生幾ニ投シテ勇
進シ、理ヲ見テ決行シ、物ニ執滯セサル者、蓋シ此ニ得ルア

リト。其詩文達意ヲ主トシ、筆ヲ下セバ千言立トコロニ成
ル。隨テ敢逸シ、復タ稿ヲ留メズ。獨リ獻筆對問ノ國字稿ノ
リ、指シテ將サニ身ニ等シカラントスルモ、秘シテ人ニ示
サバ嘗テ門人ニ謂テ曰ク、吾藩事ヲ論ズル者多ク行ハル。
天下ノ事ヲ論スルニ至テハ、則チ一モ行ハレズ。他日此稿
ヲ觀テ之ヲ知ラント。

櫻所子曰ク、琳卿農家ニ長生シ、早ク松山侯ノ知ル所トナ
リ、中扈從ヨリ宰臣ト班ヲ同フスルニ至ル。幕府政ヲ失シ、
人心恟々タルノ日ナリト雖、氏門閥世襲ノ曩時ニ在テハ、
異常ノ拔擢ヲ受ケタル者ト謂フ可シ。而シテ其學ブ所ヲ
以テ、松山一藩ノ財政ヲ革新、民政ヲ革新、後チ侯ヲ輔ケテ、
國ヲ治メ、天下ヲ平カニスルノ初志ヲ達セント試ミタル

モ時ノ非ナルヲ知テ退隱セリ其能ク此ノ如クナルヲ致
 セシ所以ノ者琳卿カ性ニ克チ欲ヲ窒ギ實踐ニ篤キ其嗜
 ム所ノ酒ヲ禁停シテ二十年ニ及ベルヲ以テ學業ニ政務
 ニ堅忍勉強ニシテ未ダ嘗テ其嗜好ヲ充タシ言ニ敏ニシ
 テ行ヒニ鈍キカ如キヲ無カリシヲ推知スベシ後進ノ士
 恆ニ琳卿カ實踐ヲ模範トシ性ニ克チ欲ヲ窒ギ敢テ
 懈ル丁無クンバ其身ノ利達ナラザランヲ欲スト雖氏
 豈得ベケンヤ若シ性ニ克チ欲ヲ窒グ丁能ハズ辨論ニ巧
 ミナルモ實踐ニ迂ナラバ則チ以テ利達ヲ求メント欲ス
 ル氏猶ホ煙無キノ火水無キノ氷ヲ求ムルカ如シ省察セ
 ズンバアルベカラザルナリ。

日本立志編卷之三終

明治十二年十一月十五日 版權免許
 全十五年三月廿五日 再板御届
 全十五年七月廿一日 三版御届

著述者

福島縣平民

千河岸貫一

東京府下芝區烏森町
壹番地寄留

出版人

大阪府平民

吉岡平助

府下東區備後町四丁目
三十七番地

出版人

全

前川善兵衛

全東區南久寶寺町
四丁目八番地

